

上海で出版された新島襄の伝記

『自歴明証』(上海廣学会、一八九五年)

島 尾 永 康

同志社大学の人文科学研究所で、日本最初の週刊紙ともいわれる、キリスト教紙、『七一雑報』(明治八年創刊)の共同研究に参加していた折、これと類似のキリスト教週刊紙が、より早い時期に中国、

おそらくは上海で出ているのではないかと想像した。この想像は適中し、『教会新報』という週刊紙が明治元年に上海で創刊されていることが分かった。これは明治七年に『萬国公報』と紙名を改め、『七一雑報』と同じく明治十六年にいったん停刊となったが、明治二十二年に復刊して明治四十年まで続いた。

『七一雑報』の四倍以上の期間刊行されたこの週刊紙は、アメリカの南メソジスト教会の中国在住宣教師、林榮知(Young John Allen, 1836-1906)によって創刊された。最初の十六年間は林榮知の個人の事業として出版され、後年の十八年間は上海廣学会という出版機構によって出された。創刊からその死によって停刊となるまで、一貫して林榮知が編集した。林榮知は日本の明治維新と西洋化の努力を高く評価し、『萬国公報』では親日的外交路線を清国に提唱した。か

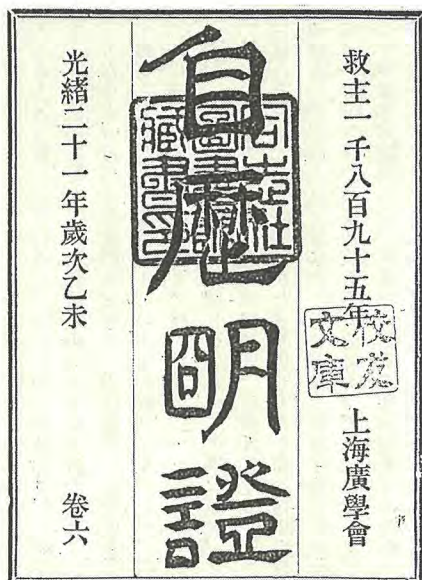
れの著作中でも重要な『中東戦紀本末』(日清戦争の記録)(一八九六)でも、日本に好意的な発言が多い。

衆目の一致するところ、林榮知は東アジアにおけるキリスト教ジャーナリズムの草分けであり、最も影響の大きい存在である。二十三歳で中国に渡り、その倍の歳月を中国で過ごし、中国で没した。

教育にも力を注ぎ、中西書院(Anglo-Chinese College)を一八八一年に上海に設立した。洋学と中国の学科の両方を重視する方針を採ったので、政府や他の教会系の学校よりも多くの学生が集まり、一九一二年には発展的に東呉大学(Soochow University)となって蘇州に移った。

十九世紀の後半、上海で主として宣教師によっておびただしい西洋事情書や科学技術書が漢文に翻訳された。それらはいちはやく日本に輸入され、『数学』、『化学』、『植物学』のように日本語に採用された用語も多い。「教会」もまたその一つであろう。

林榮知は英文から漢文への翻訳に長じ、廣学会、江南製造局など



上海英美華書館藏板

新島漢文の伝記(初版)の扉。これに続いて新島約瑟像がある。

から数多くの翻訳を出版しており、その数は九十点に上るという。その林樂知が新島襄の伝記を逝去後五年、廣学会から翻訳出版しているのには驚かされた。『自歴明証』（一八九五年）がそれである。題意は経歴により証しをたてるということであろう。シリーズ物らしく、これは巻六となっている。本文は幼年景況から臨終之事まで八章、これに林樂知による序文とあとがきがついている。簡潔な伝記ではあるが、筆者がこれまでにならぬ新島の伝記にない（と思われる）記述もあり、また周知のことがらも漢文になると異なる趣きがあるので、そのいくつかを次に記してみよう。

新島が生まれたとき、男子出生をよろこんだ祖父が、「しめた！」

と叫んだので七五三太と命名したという件りは、如意、如意と叫んだので新島如意と命名したとなっている。ただし名訳である。漢文ならではの面白さといえよう。

新島がこれも上海在住のアメリカ人宣教師、裨治文（ブリッジマン）の華文美国地理志（『聯邦志畧』）を読んで何を感じとったか。それは美国（米国）人民が自主の樂みを享受していることを初めて知ったことである。それは藩主に仕えることを苦にしながらも、きりとて家を離れること（脱藩）もままならぬ身には、驚くべきことだったにちがいない。

箱館で友人が新島をニコライに日本語教師として推薦したとき、江戸のことばが日本語の標準であり、新島は江戸人であるとのべている。林樂知の住む中国では、たとえば上海語は北京語と全く異なることから、新島が江戸人であることを強調したのである。

出国に際して友人が、日本からアメリカにいく船は非常に少ないから、ひとまず中国へいくべきである。そうすればアメリカへ渡れるとのべている。従来の伝記では、上海で乗り換えて順調に渡米したかのような印象を与える。

安漢斯德大書院（アーモスト大学）に在学中、新島はしばしばリユーマチその他の病気に悩まされ、卒業前は数か月も休んだようである。「新島の学業、病に因つて荒廃することこれを久しうす。」漢文はやはり表現が大げさである。卒業直前の長期休学も従来の伝記では、あまり触れられていない。ともあれ「格致秀才」（バチラー・オブ・サイエンス）は取得できた。古風な語句に趣きがある。林樂知はドクターになったが、まだ中国には科挙の制度があったので、

ドクターを進士と訳し、自分の肩書を「美国進士林楽知」とした。その方が中国の官僚や知識人には理解されやすかったのである。

岩倉使節団に従って欧州にいつている間に、洋銀七百元を蓄えることができた。これはアメリカに帰って一年間勉学するに足るとのべている。

帰国早々、横浜で「堂中に在りて書を講ず。是れ日人英語を用いて西人に書を講ずるの始めなり」とある。日本人が教会で西洋人に英語で説教した最初というのである。

京都では米人宣教師が山本覚馬に、北京同文館総教習、丁建良（マーティン）の訳した漢文の『天道溯源』を贈り、山本はこれを熟読した。山本はいう。西洋の鉄道、電線、輪船、機器、法律、いずれも結構である。しかし日本に欠けたところはこれに止まらない。民心を真の宗教によつて改めることであると。

同志社の環境については、「左は大廟たり、樹木繁茂す。右は昔日天皇之宮たり、頗る静趣あり」と記す。

明治二十三年正月元旦、大磯で新島最後の次のような七言絶句が作られた。

歲月如流不待人　鷄鳴早已報佳辰
劣才縱乏濟民策　尚抱壯圖迎此春

この詩はいったん英文に訳されたのが、再び林楽知によつて次のような五言詩に訳し戻されている。器用なものである。

既觀殘年去。母憂多病身。鷄鳴先報信。降福在今晨。自愧才能短。平生不逮人。何時成大志。振筆快迎春。

新島は米国へ長い手紙をかい、日本の伝道状況を論じた。新島

の日本伝道には大将の用兵の如きものがあつた。日本全国の地図を拡げ、どこを本拠とするか、どこは必ず伝道しなければならぬ土地かを、五色の水墨で塗り、一見して分かるようにしていた。臨終にのぞんで口ずさんだのは、平安　歓楽　天堂の三句であつた。

以上は本文からであるが、最後に序文での林楽知のコメントを引用しよう。「新島の大智は、自国の短所をよく知りぬいていた。かれは幼時から国家富強の術に常に留意して、忘れたことがなかった。米国に留学して、機器、製造、格致など諸々の実学を詳しく学びえた。しかもなお心に思うには、これらはただ国を富ますものにすぎず、国民に教えるにこれだけでは十分でない。今の日本に欠けたる所は、何よりも真の宗教を崇び、人心を正すにある。」

テクノロジーにおいて欧米を凌駕し、繁栄を誇る今日の状況をみれば、日本人は新島の期待に応えず、ただ国を富ますことのみを、ひたすら追求してきたといえるであらう。

林楽知のこの新島裏伝は、『日本神道教新島信道』という奇妙な題名の下に、一九〇四年に再版二千部を出した。内容は初版と同じである。これには次のような原著の英文タイトルがついているが、著者名はない。

Joseph Neesima, a Japanese Patriot & Christian (Memoir of),
translated by Dr. Young J. Allen. Second edition, Shanghai,
1904. Society for the Diffusion of Christian and General
Knowledge among the Chinese.

(元大工学部教授)

書けなかつた新島襄評伝

太田雄三

一九八八年九月からの一年間はモントリオールにあるマツギル大学で十数年前から日本史を教えている私にとって、ほぼ七年に一回あるサバティカル（研究休暇）の年であつた。それで私は数年振りに日本で丸々一年を過ごしたのであるが、この一年の間にしばらく忘れていた新島襄のことを思い出させることが二、三あつた。その一つは四十年以上も前、幼稚園にも行かない小さい時に住んでいた私の最初の記憶の地、函館に旅行したとき新島を記念する碑を見たことであつた。生来のセンチメンタリズムに駆られて、昔自分が住んでいた家を訪ね歩くうちに、私の足は自然に町の大体同じ方角に位置する新島の脱国の地の記念碑に行き着いたのである。

もう一つこの研究休暇中の出来事で、新島を思い出させたのは、私はまだ日本に置いていた図書や研究資料の大半を荷造りしてモントリオールに発送したことであつた。その時私は新島関係文献の意外な量に驚き、あらためて自分がかつて新島研究らしきことをしていた時期があつたことを思い出したのであつた。

私の未完の新島評伝は確か四百字詰原稿用紙で三百数十枚書いたところで中断したまま、何年も読み返されないうままになつてゐる。それよりあとに取り掛つた札幌農学校（後の北海道大学）の初代教頭のクラーク（William Smith Clark）、五千円札にも登場した新渡戸稲造、大森貝塚の発見者として知られるモース（Edward Sylvester Morse）などについては一応の研究をまとめてそれぞれ単行本として出版することが出来たのに、新島評伝だけはいわば途中で沈没してしまつた。その一つの理由は資料的な制約である。例えば、モースの場合だと、マサチューセッツ州セイラムのビーボデー博物館（長年モースが館長を勤めたところ）に行くと、モース文書が百箱ほどの箱に整理されていて研究者がそれらを自由に閲覧出来る体制が整つてゐる。マサチューセッツ大学アマースト校（クラークが学長を勤めたマサチューセッツ農学校の後身）の文書室に保存されているクラーク文書についても研究者の自由な利用を許すことは同じである。新島の場合は、いろいろもつともな事情があつたのだと思うが、私が新島研究をやつてい

た頃は（現在のことは知らない）、同志社の新島先生遺品庫に保存されてきた新島関係一次資料は私のような同志社外部からの研究者の自由な閲覧を許すようにはなっていなかった。このため、私の新島評伝は資料的に新味のないものにならざるを得なかった。私が途中で新島評伝を書き続ける勇気を失ってしまった一つの理由はこれであった。

しかしながら、それが唯一の理由ではない。同じ資料を使っても、先行の研究が当然の前提としていような評価の基準や枠組みを離れて、新しい視点から見直すと、新しい新島像が浮び上ってこないとは限らない。結局、私の新島評伝が行きづまってしまったのは、新鮮な視点の欠如に一番大きな理由があったようだ。

新島はいわば「非凡な凡人」といったタイプの人だったように思える。ともすれば、我々の目（少くとも、私の目）に映るのは、彼の平凡さ（思想、学識等）である。しかしながら、新島が多くの同時代人に感銘を与える人間的魅力を持っていたことは事実であるし、それは恐らく単なる買いかぶりでなく、彼の隠し持っていた非凡さの反映であったのであろう。

私が函館で見た記念碑の記念する出来事、新島の日本脱出、が起きたとき、新島はすでに二十一歳の成人であった。その時から約十年間の海外生活を通じて、新島は、新島とは直接関係なく使われた福沢諭吉の表現を借りれば、「一身にして二生を経るが如し」、めざましい変貌を遂げる。「一身二生」のうち新島自身は日本脱出以前の前半生ときっぱりと訣別してしまっただけに見える。彼は日本の伝統といったものの価値を認めず、精神と物質両面での日本の欧化のために働くことを自己の使命としたように見える。

それでも、日本人あての手紙さえ英語で書くことがめずらしくなかった後半生の新島だが、彼の書いた英文と和文の手紙を読み比べてみると、背後に人間的迫力といったものを感じさせるのはやはり多くは和文の手紙のようだ。

一八四三年（天保十四）年生れの新島は世代的には徳富猪一郎の言った「明治ノ青年」ではなく、「天保ノ老人」に属する人である。福沢諭吉の『福翁自伝』からはじめて渋沢栄一「雨夜譚」、前島密「鴻爪痕」（ともに『日本人の自伝』第一巻、平凡社、一九八一年、所収）などの天保生れの先覚者達（いずれも明治になる以前の旧日本で人間形成を遂げた人々）の迫力に満ちた自伝を読むとき、新島の隠れた非凡さの秘密は、アメリカ化されたキリスト教紳士としての新しい新島が依然として自分が否定したはずの旧日本における人間形成を通じて身に着けたものによって支えられていたことにあるのではないかと思えてくる。

全十巻の予定の『新島襄全集』の最初の巻が同朋舎出版から発行になったのは一九八三年のことだったと思う。私は新しい巻が出るたびに日本から送ってもらうように手配しているが、この全集はまだ完結していないと思うののこのところしばらく日本から新しい巻が届くことがないのは単なる発送の手違いなのだろうか。私は手許に『新島襄全集』全巻がそろったら、もう一度日本近代史における新島の意義といったことをくわしく考えてみたいと思っている。そして、早くその日が来ることを望んでいる。

(McGill 大学准教授)

同志社と新島

幸 日 出 男

もう十五年も前になるが、『同志社時報』に、「すぐれた創立者を持ちえたことは、同志社の誇りにちがいないが、それをかつぎ廻っているすがたは、あまりほめたものではない」と書いたことがある（五十号）。永眠百年ということで創立者讃美一色になりそうな空気の中で、こういう文章をわざわざ示すのも、何か気がひける思いもあるが、やはり今の時点でこのことはあらためていった方がよいような気がする。

新島襄はアメリカ滞在中に、キリスト教信仰をはつきりと告白するものとなり、その生涯をキリスト教の伝道と、キリスト教主義の教育にささげようと決心した。キリスト教の第一のポイントは、唯一神信仰である。父なる神、そしてその独り子であるイエス・キリストのみを礼拝して、他の何ものをも拝しない。特に新島のふれたビュリタンのキリスト教は、神以外のものに対して礼拝まがいの事をするのも拒むのである。新島を創立者としてもつ学校は、新島がうけとめたこのキリスト教を正しくうけつぎたいものである。新島もその事を心からねがつていたと思う。新島をかつぎ廻って新島礼拝にならぬよう

にくれぐれも注意せねばならない。いろいろなものを神格化しやすい日本の風土では、このことはどれだけ強調しても足りないくらいではあるまいか。宗教改革者ジャン・カルバンの墓石には、ただ「J・C」とイニシアルがきざんであるだけだという。自らの名でなく、まことの神の栄光のみがたたえられる事を求めた改革者の信仰につらなるものになりたい。

この事に関連して一つだけ具体的な提案をしたい。永眠百年をくぐりに、新島襄を「先生」と呼ぶのはやめにしたらどうであろうか。筆者などは、以前から、あくまで歴史上の人物として扱って「先生」よばわりはしないで来たが、周囲を見渡すと、「先生」をつけている人が結構いる。その事を批判するようなつもりはない。個人的敬意を表現することばの使い方は自由である。しかし、直接に教えをうけたもの、あるいはその子供の世代というならともかく、いつまでもいつまでも、この呼称を使いつづけていると、いつしか、これが単なる個人的敬意のことばというよりも、特別の尊称になる可能性がある。

新島襄は自由人か

同志社はピューリタニズムの学校であるとか、あの人はピューリタニズムではないとか、戦前はそういうことが絶えず耳にはいったが、戦後はさっぱりになってしまった。

わたしはそのことを意識しながら、昨年の春「新島襄とピューリタニズム」という題名のエッセイを書いた。そして『新島研究』の第七二号に掲載してもらった。

ところが同志社の関係者が意外に多数わたしのエッセイを読んでくれていて、さまざまな読後感がわたしの所へ寄せられた。わたしは『新島研究』は案外よまれているのだと感心したり、ピューリタニズムということは未だ生きているのだということに気がついたりした。

思い出してみると、わたしは一九三〇年（昭和五年）三月に京大の文学部を卒業したのであるが、ドイツ文学専攻であったため、就職は絶望的であった。ところが三月の下旬に、同志社大学予科でドイツ語を教えていた萩原先生が酒に酔いつぶれて、真夜中に京都御所の芝生の上にぶつ倒れてしまった。

和田 洋一

中立売署の警官に見つけられ、萩原先生は警察の留置場でひと晩お世話になった。翌朝、警察から同志社に電話がかかった。同志社の予科長だった速水藤助先生は、同志社の普通学校、神学科の出身者で、厳格なピューリタン。同志社の名誉を傷つけたということで、即日辞表を出しなさいと萩原教授にせまった。萩原さんは学校の先生という職業は好きでなかったのだ、さっさと辞表を出して松竹映画の助監督になってしまった。わたしが後任者になったのは、わたしの親父のおかげもあって、つまり文学部の和田琳熊教授は敬虔なクリスチャン、その長男であるわたしはまさか酒に酔いつぶれて、警察のお世話になることはないだろう、ということになったので、同志社という学校と速水予科長とわたしの親父のピューリタニズムのおかげで、わたしは一九三〇年という深刻な失業時代に、就職することができたのである。そういういきさつがあるので、わたしは同志社のピューリタニズムの悪口を言うことができないという事情があった。しかし同志社創立後まもなく制定された同志社校則第十条には飲酒、登楼が禁止されて

いるのは未だいいとして、「芝居、浄瑠璃、義太夫など淫楽がましい所に立ち入るのを禁じる」というのは、あんまりだ、とわたしは昔も今も思っている。校則制定の責任者は新島校長であろうが、初期の同志社出身者に芸術家が稀なのは同志社校則第十条と関係がある、芝居、浄瑠璃まで敵視するピューリタン新島裏は自由人、自由の戦士とは言えない。わたしはこのように思つて最近にいたつてゐる。

わたしが同志社中学の三年生のとき、上級生が、「新島先生は自由を愛する人であつた。しかし新島先生の創立した学校、同志社には酒を飲む自由がない」と叫んだことについては、わたしはすでに『新島研究』の第七二号に書いた。

同志社中学の生徒時代のわたしにとっては、禁酒禁煙の規則は何等苦痛ではなかつたし、新島先生は自由を愛する人だと教えられていたので、いま引き合いに出した上級生の叫びも、それほど重大な問題とは受けとらなかつた。自由とは、何をしてもいいということではないのだから、酒を飲むなど新島先生が決めても、別におかしくないと、その頃は思つていたのである。

わたしは同志社中学生のときに、新島先生が、いかにえらい先生であるかを繰り返しおそわつた。同志社教会の安部清蔵牧師は、一年間、週に一回、新島裏の生涯について教室で話された。チャペルでもいろいろ感動的な話をきいた。新島裏とアメリカ人宣教師と意見があわなくなると、悪いのはアメリカ人宣教師であつて、新島先生の正しい主張にアメリカ人宣教師が不当に反対するというような印象をわたしはもつたが、おとなになつてから、正しいのはむしろ宣教師側にあつたと気がつくようになった。新島裏は自由を愛する人であつたという教

えも、わたしたち中学生はするように教えられたというだけのことでおとなになつて判断力がついてくると考え方も変わつてきた。

若き日の新島が蘭学、英学を学び、西洋文明に惹かれ、西洋文明の姿を直接自分の目で見たい、キリスト教国にも出かけていつて佛教や儒教とはちがつた新しい宗教に触れてみたい、そう思つても日本には鎖国令というものがあつて海外に出ることを許さない。海外への脱出を執行するためには命をかけねばならない。新島青年は命をかけた。

封建的色彩の強い日本とくらべて遙かに自由なアメリカで一〇年の月日を送り、自由を身につけて日本へ帰つてきた新島は、ニュー・イングランド地方のピューリタニズムをも身につけていた。芝居、浄瑠璃、義太夫への嫌悪感は、純日本的なものへの新島の嫌悪感であつたかも知れないが、ともかくも断乎たるピューリタニズムは、自由の精神とは相反するものであつたと見なすべきではないか。

そこで、「新島裏は自由人か。」という問に答えるとすれば、新島裏は、一〇年間生活したニュー・イングランドに本當のキリスト教を見いだし、古いヨーロッパ諸国に不健全なキリスト教を見いだしたのであるから、日本へ帰つてから、同志社を創立するにさいしては本當のキリスト教の学校、それはピューリタニズムの学校、清教主義の学校でなければならなかつた。新島先生の渡米一〇年は長すぎたと叫んだのは徳富蘇峰であつたが、新島裏には長すぎたという反省は恐ろしくなかつたであらう。彼はニュー・イングランドのキリスト教をそのまま京都の土の上に実現しようとした。同志社創立直後に制定された「同志社校則」は新島校長の決意表明であつて、近松の芝居を見て楽しむ自由、酒によつぱらつて楽しむ自由を彼は望まなかつたのである。

わたしは昨年の一二月一日、京都鹿ヶ谷の法然院で開かれた「河上肇先生記念会」の總會に出席し、河上肇が著書『近世経済思想史論』の中で、マルクスの考えはこうだ、マルクスはこうに考えた、マルクスの見解を紹介するばかりで、著者自身の見解をひとこととものべなかつたことを指摘した。後身国の学者である河上は、マルクスの名前を二三四回出したが、自分の名前、自分の考えはついに一度も出さなかつたこともつけ加えた。(先進国アメリカからひたすら学ぼうと

した新島と、先進国ドイツのマルクスからひたすら学ぼうとした河上との似通った点、マルクスの名前を二三四回くり返し、河上自身の主體的な考えをついにのべなかつたことをも指摘した。)わたしの法然院での話は、河上フアンの方の皆さんの気持ちを悪くさせたかも知れないが、どうしようもない。新島先生をほめ倒すこと、始めから新島襄はりっぱな人、りっぱな自由人と決めてかかることがいいとは、わたしにはどうしても思えない。

(大学名誉教授)

追悼集

I

(同志社社史資料室編・発行)

——同志社人物誌——明治十年代—明治四十年

追悼集

II

(同志社社史資料室編・発行)

——同志社人物誌——明治四十一年—大正四年

同志社では明治二十年ころから、社長(総長)をはじめ役員、卒業生、教職員、学生生徒が永眠すると、その死亡記事とともに、追悼のことばや故人の略歴などを各学校の機関誌(たとえば『同志社文学』『同志社女学校期報』『同志社校友会会報』『同志社時報』など)に掲げて哀悼の意を表してきた。

その貴重な記事は、これまで古い機関誌の中に埋もれていて、極めて利用したい状態にあったが、社史資料室は先年来、それらの記事の総てを探し出して書物にまとめる作業をおこなってきた。

た。

第一巻には、新島襄、山崎為徳、山本覚馬、森田久万人、片岡健吉らの他、男女各校の関係者約一〇〇名の記事が収録されている。

第二巻には、J・D・デイヴィス、元良勇次郎、市原盛宏らに関する記事の他、第一巻以降の年次に機関紙に掲載された新島襄、山本覚馬、松本五平らの資料も収録されており、約一一〇名の記事を収めている。

第三巻も刊行されており、これらの『追悼集』は、それぞれ何らかのかたちで同志社史を彩り、また同志社史を築いてこられた物故者たちを記念するものであるとともに、「同志社人名録」の役割をも果たすであろう。

『追悼集』は各巻(各一五〇〇円)とも同志社収益事業課で取扱っている電話(〇七五二五一一三〇三七・八

新島襄先生を想う

藤代泰三

新島襄先生の名前をわたしはじめて知ったのは、小学生のときか、中学生の低学年のときであつたであろう。そのころわたしは東京の日本橋に住んでいたが、家の近くに教会があり、その日曜学校に通っていた。そして青山学院中学部に入學し、毎日学校の礼拝があり、また日曜日には青山学院教会の礼拝に出席していた。そんな少年時代のある日、「少年倶楽部」という雑誌か、娯楽雑誌「キング」かに新島先生が、学生のストライキの責任をとってご自身の手を杖で打たれた記事がのつていた。雑誌のはじめの方に、当時の光景のイラストが、色刷りで掲載され、そこに説明がついていた。わたしは新島先生のこのような愛のむちの出来事を知った。それ以来このことはわたしの脳裏から離れなかった。このような記事を雑誌にのせることができたのは、まだわが国が軍国主義に突入する以前であつたからであらうし、大正デモクラシーの雰囲気がある社会のなかに残っていたからであらう。

中学では、塚本与三郎という先生が、聖書「イエス伝」の時間に花崗山の出来事をくりかえし話してくださった。つまり熊本洋学校の生

徒たちが花岡山で、将来キリスト教の伝道のために献身しようと決意したことである。彼らは新島襄先生を慕つて同志社に大學してきたという物語である。当時の青山学院には、学園の奥深く宣教師館が立ちならぶ美しい庭園があつた。そのまん中に小高い丘があり、これを花岡山と呼んでいた。塚本先生に連れられて、わたしたちはよくここへいったものである。今でも花岡山は場所こそちがうが、青山学院のなかにある。まことに奇妙なことではないか。花岡山が同志社にはなくて、青山学院にあるとは。

青山学院神学部卒業後、わたしは同志社大学文学部神学科に入學した。青山学院はメソヂスト教会系の学校であり、同志社は会衆教会（組合教会）系の学校である。青山学院のなかでは、学生も教職員も煙草をすうことは禁じられていたが、今でもそうかも知れない。しかし、同志社にきたら、彼らは学内で煙草をふかしていた。青山学院はミッシェン・スクールであつたから、とくに創立者として語られる人はいなかった。本多庸一先生が日本人として初代の院長であつたから、よ

く本多先生の名前はきかされた。しかし、本多先生は創立者ではなかった。同志社では、はじめから創立者がはっきりしていた。新島先生である。もちろん長い間同志社はアメリカカンボードの援助を受けていたけれども、新島先生をはじめとして、先生を助けた宣教師方はニュー・イングランドからこられた。したがって、新島先生にも宣教師にもピューリタン精神が旺盛であった。同志社の学内では、学生も教職員も煙草をふかしていたけれども、ここでは青山学院で見ることができなかつたピューリタン精神を見ることができたように思う。例えば、同志社教会の聖日礼拝に集まる教職員の夫人たちの服装はつましかつた。しかし他方、青山学院にはメソヂスト教会の背景があり、したがってこの教会の創始者ジョン・ウエスレーの伝道精神が伝統となっている。

しかし、歴史的にいろいろな経緯はあつたにしろ、青山学院には青山学院教会も神学部も今は存在しない。しかし、同志社には同志社教会も神学部も存在している。これは、やはり教会にしても、学校にしても、創立者が日本人であつたということがはっきりしているからかも知れない。新島先生は同志社の創立者であつたが、また同志社教会の創立者でもあつた。青山学院と比べて、なにか、大学に関するかぎり俗っぽい感じのする同志社、そこに教会と神学部が存在しているとは。

学校の創立記念日と創立者の永眠記念日に、その墓前に朝早く生徒や学生、また教職員が集つて祈禱会を開く学校は、同志社以外世界中どこにもないであらう。もと総長の住谷悦治先生は、校祖という名称を嫌い、意識的に創立者といつておられた。校祖は、なにかしら教祖

を連想させるからであらうか。早天祈禱会に学生時代からわたしもなれども若王子にのぼつた。最近健康上いなくなつたが。墓前への道は、かつては樹木が生い茂つていて薄暗く、途中ところどころに提灯をともした学生が立つていた。その提灯の紙の色は、赤と白で、今祭りに見られるものである。

新島先生は早くこの世を去られた。それは当時の生徒や学生、また教職員の痛恨のきわみであつたであらう。とても悲しい出来事であつたにちがいない。だから、彼らはそのころ山にぼつては墓のまえて、先生を想い決意を新たにすることであらう。その余韻が、一年に二度の早天祈禱会を支えているのかも知れない。

新島先生は二百年後に同志社の完成を期したが、二百年というまい、三百年、あるいは五百年後の同志社の完成を待とうではないか。

(大学名誉教授)



私と同志社・新島襄先生

緒方純雄

年月のたつのは早いものである。私が同志社大学に入学して四十七年、助手となつては四十年になる。いま定年退職をまぢかにして、思い起こすことも多い。

一九四二年十月に私は同志社大学に入学した。的確に言えば、同志社大学文学部神学科に編入学した。当時、私は関西学院大学商経学部三年（最終学年次）になつたところであり、さらに九月中旬には、今でいえば学部自治会委員長になつたばかりであつた。こうしたなかで神学科に入ることに決めたのには、私なりの動機があつた。同志社に惹かれて入つたわけではなかつた。そこまで同志社を知つてはいなかつた。ただあと一年すれば、卒業し、兵役につき死は必定だと覚悟していたという事情があつた。郷里が熊本だから、どうせきびしい戦地に向けられることになり、生還できるなど思いもよらぬことであつた。まごまごしながら、信仰に入りかけていた私は、いづれ死ぬ身として、朝に道を聞かば夕に死すとも可なりと言ひ切ることができるようにと、信仰を確かなものにしたいと思つて入学志願した。関学には専門

部に神学部があつたのだから、そこに入つてもよかったのだが、商経学部自治会委員長になつたばかりの私がそんな行動をとることは矜持が許さなかつたし、また波紋を起し、説明したり釈明することが煩わしかつた。また転換の決断は新しい場へ出て行くことを私に促したからである。また正直に言えば、同志社大学だけに、当時では日本唯一の大学令による神学科があり、他の神学教育機関はみな専門学校であつたことも、撰択の一つの動機であつた。また、同じく関学大英文科から神学科へ進んだ長坂羊一さんが私の決断を励してくれたこともある。同志社に彼を訪ねたとき、アーモスト館前で神学科主任の富森京次先生に私を引き合わせてくれた。

さて、入学試験であるが、記憶に間違いがなければ、致遠館北の旧徳照館で面接を受けた。筆記試験の記憶はない。編入学であつたから、免除されたのかも知れない。その時、洗礼も受けていない私に、富森先生曰く「君、牧師になるんだね。」牧師のことなど念頭にもなかつた私には一瞬のとまどいがあつた。だが「はい」と答えてしまつた。そ

う答えねば、入れて貰えないと咄嗟の判断が働いたにちがいない。数日後に入学許可を知らされた。そして、二カ月後に私は洗礼を受けた。誰からも強制されなかった。一九四五年九月に卒業。補教師試験を受け、向日町教会で奉仕、翌年六月に長崎馬町教会に赴任した。

十月五日神学館（クラーク館）チャペルで神学科の入学式が行われた。大塚節治先生が説教者であった。内容は覚えていないが、大塚先生としては随分熱のこもった説教であった。後で長坂さんが「大塚先生には珍らしく熱っぽかったなあ」と言ったのを今も覚えている。人間の記憶というものは随分あやふやであるが、それなりに要領を得ている。同級生は十数名だが、まだ現役の牧師もいるが、すでに文、塩野、三浦君などは召されている。当時の状況の中で、それぞれ驚く程個性豊かで、自由闊達であり、友情に厚かった。

新島先生との出会いは入学早々のことであった。同志社に入るまで、同志社そのものについて、新島先生についても、まして多士済々たる卒業生のことなど殆んど知識皆無であった。今の志願者などと比較すればお粗末なものであった。心にあつたのは大学神学科であり、この新しい場処で我ひとりとなり、決断の道を歩むことだけであった。初めて新島先生との出会いを経験したのは、入学して間もないころ、若王子山上の墓地においてであった。

一九四〇年一月二十七日午後遅く小雨の中を三千人の葬列が続き、百数十名の学生がかわるがわる先生の柩をかついで此の山上へ登ってきた。百年の年月に古びた墓地は、今は静寂が支配している。入った正面に先生の墓、左右に八重夫人、デイヴィス先生の墓が並んでいる。同志社の歴史に名をとどめる人々の墓、新しくは宣教師、教職員分骨

墓碑が並んでいる。訪れる人の目はそれらに向けられても、門の入口右脇の小さなひっそりと立つ松本五平之墓に向けられることはないだろう。一九四二年の秋、この場処で、墓について聞かされた物語は、不思議に私の心を打った。

松本五平さんは同志社の小使いであった。新島先生は彼と親しみ、常々彼を「五平さん」と呼んでいた。短軀の五平さんを学生達は「五平!!」と呼びすてにすると、彼は自分を「五平さん」と呼びかける先生のことを告げてたしなめたという。彼の願いは、死んでのち先生の墓守りとなることであった。後に同志社理事会は彼のたつての願いを容れた。まるでその墓は先生の墓を守るかのように、入口脇にひっそり控え目に立っている。この物語りに入学早々の私はひどく感動した。ここに新島先生と五平さんとの人格的呼応があり、心と心とのふれあいがこの墓地のしじまに生きている。あの明治の時期に人々にチャレンジしたのは、人と人とのかわり方、他者へのかかわり方、ひいては人間そのものの根本的把握である。これの根源であったのは信仰である。これが当時の社会・文化状況の中で、先生に具体的な使命を負わせ、同志を得て同志社創立に至らせた。これが今同志社のどこかに生きていなければ、同志社も虚名にすぎないだろう。

新島先生はキリスト教主義による大学設立を志した。明治二十一年十一月「同志社大学設立の旨意」の中で、先生は米國勉学中に「教育が国運の盛衰に大きな関係をもつ」と確信し、教育に身をささげる決意をしたと記している。この確信は欧州視察途上でますます深まったが、帰国後日本の現状に眼を転じて、以下のように慨歎している。「今

や、わが国において欧米の文化を取り入れるにあたり、ただ物質的文明を取り入れ、学問上の文明を取り入れ、あるいは鉄道を取り入れ、蒸気船を取り入れ、制度を取り入れ、文学の思想を取り入れてきたのであるが、これを要するにそれらの文明が起ったところの大きな根底、大きな本源にいたってはまだ手をつけていなかったように思われる。大きな本源とは、先生によれば精神である。だから「われわれは科学や文学などの知識だけを学ばせるとどまらないで、これらを学ばせるとともに、さらにこれらの知識を働らかすところの品性と精神とを養いたいと望んでいる」とある。このように知識を働らかす主体であり、本源である品性・精神を養うのはキリスト教主義である。これが青年の精神と品性を養う活力である。キリスト教主義による精神、人間形成が先生の教育目標である。この人間形成なくして文化形成は不可能という厳しい判断に立つ目標であった。ここにすぐれて精神である人間主体、人格主体形成の道が先生によってとられたのである。これは当時の日本の状況へ向けられた先生のチャレンジであった。この人格主体形成の道は叫ばれて久しい。しかし、それは、今や風化して卑しさとどまるところを知らない日本に対するチャレンジである。また風化が及んでいと思うれる同志社への問いかけでもある。主体性について多く語られる。しかし単なる主体性は直ちに我性にすりかわり、墮して卑しくなる。みずから人格主体であり、またこれを育成することに情熱をもち、この目標を分かちあうことがなければ、同志社に期待するところがない。

四十年にわたる教師生活から自戒していることがある。人は長い目

で見るべしということである。正直に言つて、教師が好きなのは、やはり出席がよく、勉強もよくし、成績のよい学生である。しかし、それはいつの間にか人物評価となる。しかし、卒業すると、評価の低かった者が、はなやかな形をとらないとしても、その働き、生き方において、敬愛すべき人物となり、他方、高く評価した者がその逆となる場合がしばしばである。精々四年とか六年の年月をもつて、可塑性に富み、弾む生命をもつ若者を見、評価ししかも人物評価するなど自戒しなければならぬ。人は長い目で見なければならぬ。

それにつけて思い出されるのは、新島先生の教育論である。先生によれば、教育は「型」にはめこむことでなく、自由・自主の人間教育が強調されている。「この大学からは、あるいは政党に入る者も出るであろう。あるいは農工商の業に従事する者も出るであろう。あるいは宗教のために働く者も出るであろう。あるいは学者となる者も出るであろう。官吏となる者も出るであろう。その成しとげることとは種々様々にちがっていて、あらかじめ定めるわけにはゆかない。」先生の言葉には、人間は神によつて自由なものとして存在させられている。これには人間がこの自由のうちに神へ応答し、また他者へ応答するためであるという意味がこめられている。しかし応答の仕方については「あらかじめ定めるわけにはいかない。」それは自分がそのいる場で、神と他者への応答のうちに撰ぶところのものである。その「成しとげること」も長い年月を要し、さまざまにちがったものとなるだろう。「あらかじめ型」にはめこむことのできないものである。人生におけるこのような形成のドラマを見とどける姿勢が教師になればと、特に神学部の教師としてしきりに思うこの頃である。

(大学神学部教授)

ハーヴァードで出会った新島先生

大 下 尚 一

この文の依頼を受けたとき、随筆風に書いてほしいとのことであった。気軽に引受けて、「新島襄先生永眠百周年記念特集」に執筆できることの光栄を、あらためて感じた。しかし、新島先生と無関係なことではふさわしくないだろうという気がして、「私にとつての新島先生」という、晴れがましいことを記すことになった。

私が同志社について考えるとき、新島襄のことを思わないわけにはいかない。これはもちろん多くの人にとつても、同様であろう。新島襄なしで同志社が語れないということは、われわれにとつてまことに幸いである。少なくとも、同志社について千差万別の意見があつても、校祖として新島という一人の人物があるのだから、互いに意見を集めてがかりがつかめる。

しかし新島は、理解しやすい人間ではない。歴史上の人物として彼を見ると、すなわち自分の主観と切り離して新島を見ようとする、彼の行為にはアメリカへの密航から同志社設立の決意にいたるまで、多くの謎がでてきて、これに満足な答えを与えることはできない。新

島自身の説明でも、そのまま受け入れるのは困難である。アメリカに渡つて聖書を自由に学びたいというのが、脱国の動機のどれだけの部分を占めていたのか。また日本にキリスト教の学校を設立するための資金を求めて、ラトランドのアメリカン・ボード大会で訴えた新島。ボード関係者の反対や、恩人ハーディ氏の忠告にもかかわらず、大会の場で会衆に寄付を呼びかけ、資金が集まるまで壇を降りないという行動は、理解しにくいだけでなく、どう考えてもほめたことではない。新島がどうして、このような行動にでたのか。これを客観的に説明するのは、容易でない。

あの自らの手を鞭うつたという話についても、しかりである。いかにその場の状況を考慮しても、生徒たちが校則にもとることをしたと、いって、生徒を罰するかわりに生徒の面前で自分を鞭うつというのは、普通では理解できない。天才的教育者であるのか、見事な演技者であるのか、アメリカで学んだ贖罪の神学が身についてたのか。いずれにしても、その行為には謎が多すぎる。

しかし歴史的人物としてでなく、同志社教育を象徴する校祖として彼を見た場合、疑問が比較的簡単に解けて行く。手を鞭うった新島の性格に反発を覚えながらも、同志社設立にすべてをかける熱意、生徒の心をつかまえて、決して離そうとしない心意気に、共感を覚える。

このように歴史的理解の対象としての新島と校祖としての新島とが、どこかで結びつくのである。最近私は、自分が新島裏と呼ぶよりは、新島先生と先生をつけて呼んでいることが多いのに気づいた。歴史上の人物としての新島裏よりも、校祖としての新島先生に、より親しんでいるということであろうか。新島先生の話を生徒時代に聞いてから、三十年以上たった現在まで、私はさきあげたどの話を聞いても、素直に感激したことはないように思う。それなのに、歴史上の新島について知りたいと思えば思うほど、新島先生に惹かれるのは、どういうわけか。

この疑問に私自身が用意している答は、私が新島に出会った体験をもっているということである。私がハーヴァード大学で留学生生活を送ったのは、一九五八年秋から一年間である。シカゴ大学で一年勉強した後で、ハーヴァードのフェローシップをいただいた。学生として試験に追われる身ではなかったから、大変恵まれていたのだが、それでも数か月たった頃には、プレッシャーを強く感じていた。留学の成果も思うように上がらない。焦燥感にかられる日が多くなっていたように思う。そのようなある日、ワイドナー・ライブラリーの書庫の中で、*Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* とする一冊の本が眼に留まった。今この本は、北垣宗治教授の訳で新島全集（十巻）におさめられているが、新島先生の恩人ハーディー氏の三男、アーサー・シャバ

ーン・ハーディー氏が、新島の手紙や日誌を集めて、解説を加えたものである。この本を単なる興味で借りて帰った私は、その晩、夢中でこれを読み続けた。まず新島がハーディー夫妻宛てに書いた手紙から、彼がよく寂しさにおそれたり、自分がしたことを得意げに話したり、まさに、ただの留学生新島であることが心にしみた。

その手紙から一つのエピソードを紹介しよう。それはアメリカに来て、二年たったときである。それでもボストンからケープコッドに汽車で行くとき、乗り換えるのを知らず、ニューベッドフォードまで行ってしまった。夕闇が迫るこの町を、一人歩く寂しさと不安。その気持が、にじみでるような手紙である。宿を教えてもらうため、やはり教会を訪ねるのがよからうと考える。その教会の牧師から親切にしてみようが、見知らぬ人の世話になることは、恥かしさと嬉しさが入り交じった複雑な気持になるものである。この気持が肌から伝わってくるような文章である。私は一人の先輩から留学時代の経験をじかに聞くような気持で、彼の手記を続んだ。

この本を通して知った新島は、歴史上の新島裏でもなく、新島先生でもない。一人の魅力的な日本人留学生である。私はその人に出会って話しこんでいたが、相手がいつしか同志社の校祖の新島に変わっている。新島という人は、珍しい才能をもった人物である。出会った人をひきつける力、それに加えて、この出会いについて他人に語り、それをまた新しい出会いのチャンスにする、こんな才能に恵まれた人だ。私はハーヴァードでの新島との出会いの体験を持つがゆえに、その人を新島と呼び、かつ新島先生と呼ぶことができるのである。

（大学文学部教授）

『新島研究』と「雷さん」の絵

大 鉢 忠

新島研究という言葉は二つの意味に使われている。一つは新島研究会が刊行する雑誌『新島研究』であり、もうひとつは新島襄先生の人生と思想を学問的に研究する一つの学問分野としての新島研究である。この両者を始められたのは同志社大学名誉文化博士森中章光先生である。森中先生は同志社普通学校時代の恩師波多野培根先生より、新島先生を研究してはとの薦めを受けられたそうで、以後新島先生に魅せられ、徳富蘇峰先生から物心両面の援助を得ながら新島研究をスタートされ、『新島研究』を発刊された。学問としての位置付を可能にするものは一九八三年から始められ現在刊行中の『新島襄全集』全十巻中の歴史的資料である。森中先生は、九十五歳の今日でも、なお新島研究における金鉱を探すべく研究活動をなさっており、第二次大戦中には新島先生の書簡や資料を収集するため、東奔西走された。おかげで、貴重な新島書簡の一部または写しが戦火で焼失する事なく新島遺品庫に保存する事ができている。新島先生についてのもう一つの大切な資料は英文書簡で、これらの現存する資料すべてが『全集』の形

で出版される。同志社はもとより近代日本が生成発展する過程の一面を知る歴史資料も含まれており、十九世紀の日本研究とアメリカ研究、日本におけるキリスト教の歴史等の重要な断面が新島研究を通して明らかとなってくるものと思われる。総合的な研究が進み、新島研究という一つの学問体系が発展していくことになる。ちなみに雑誌『新島研究』はすでに七十五号を数え、学術雑誌としての国会図書館の登録番号も与えられている。

さて、『新島研究』七十二号の表紙としてカットに「雷さんかみなり」の絵が用いられた。表紙にこれが用いられたことに対して賛否両論が出され、思わぬ反響に驚いた。このカットの絵をどう思われるだろうか。新島先生の一面を伝えるものとして、この絵を取り上げてみたい。

「雷さん」の絵については七十二号の奥付に文学部井上勝也先生の解説がある。原画はアームスト大学図書館の古文書部に保管されており、ハガキより少し小さ目の水彩画である。この絵の裏には新島が贈ったと思われる相手によって英文で「日本人によって考えられている



新島先生の「雷さん」の絵
(アーモスト大学図書館古文書部所蔵)

雷神、しかしこの考え方は最近改められている。ジョセフ・ニーシマより」と書き込まれている。新島がこの絵を描いた理由は明かでないが、想像することは出来よう。幕末の日本では、自然科学の発達が遅れていたが、アメリカでは十八世紀にはすでにベンジャミン・フランクリンによって、雷と静電気による放電との相関が確かめられていた。新島がアーモスト大学の学生であった時、物理学の授業では、一メートル近くもある絶縁体円盤を回転させる静電発電機によって、ライデン瓶と呼ばれる蓄電器に電荷を十分蓄え、放電を人工的に発生させるデモンストレーションの実験があつたと思われる。ライデン瓶の電荷は一回の放電で全て消滅するのでなく、一部がライデン瓶中に残留し、電極間隔をもう一度短くすると、「パチッ」と二次放電を起こす。ライデン瓶に残留電荷が残っていることを忘れていると、この二度目の放

電に感電してびっくりすることになる。

新島在学中の一八六九年七月四日のアメリカ独立記念日、人々は夜遅くまで花火をしたり大騒ぎをした。翌朝、アーモストの町はひとつりとしていた。新島は朝食のため友人と二人で外に出たところに、走ってきた子供が前夜の残りの花火を炸裂させた。新島はにつこり笑って隣の友人に「あれは残留放電だね。」と言うユーモアを言つてのけた『新島襄全集』第十巻八十三頁。新島はこういうジョークが言えるまでになっていた。そして「日本では……」となつたのではなからうか。

また雷に関連して、それより以前(一八六七年三月)に父民治に出した手紙の中で、アンドーヴァーの町の家々が「鍊(鉄)の雷よけを備え候故、実に雷火等の心配は無御座候」(『新島襄全集』第三巻三十二頁)と避雷針の存在にふれている。新島の両親の出身地上州安中は雷が多いところで、しばしば雷火も見られたようである。雷さんが雲の上で暴れているといった考え方は多くの日本の庶民が信じており、新島はそのイメージをもとに虎の毛皮のパンツをはいた雷神が太鼓を打ち鳴らす絵を描いてみせた。アメリカでは参考にする絵もなく、まさに新島が幼少の時から日本脱出までに得ていた知識で表現したものである。新島は絵がもとと上手であつたが、雷の科学的知識と避雷針を発明した欧米文化を吸収した上で、日本の人の抱く素朴な雷神のイメージを絵という万国共通語によって表現しようと考えたのであろう。このように考えると「雷さん」の絵にも新島先生の人柄が出ているように思うのだが……。私はこの絵をアーモスト大学で見た時は喜びを隠しきれなかったことを思い出す。

この「雷さん」が表紙となつた『新島研究』七十二号を本学電気系

学科新一年生のある学生さんに紹介したことがある。電気に関係があると思ったからである。彼は「歴史には関心がありません。」「他に多く読むものがあるので」といつて手に取ることもなく、私は若者の関心を得ることがいかに難しいか考えさせられた。何事も人に強制することなく、関心を与えるのは難しい。一つの山をその人自らが乗り越えて自分で興味を見つけるものなのだろう。私自身の場合を最後にふれておこう。

新島先生との最初の出会いは、次の春日小学校校歌二番の中にある。「秋の月てる御苑のあたり、新島先生生まれしところ、これに近くこれを望み、ともに学びともに遊ぶ……」と。私は一九五〇年代に河原町丸太町角にあるその小学校の生徒であり、その時にこの歌が出来たわけである。しかし新島先生との本当の意味での出会いは十年程前に新島先生の母校アーモスト大学で在外研究を行なった時かもしれない。いま考えてみて、それには三つの要因があったと思う。その一つは、私がアーモスト大学に滞在した時、前述の井上先生もアメリカでの新島襄の研究のためにそこにおられ、新島先生の人物像を詳しく聞く機会があったこと、二つ目は新島先生の英文書簡を中心に編集して作られた第一級の伝記として新島研究の原点になっている *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* (1891) のコピーを井上先生に見せてもらったことである。そして三つ目はその本をアーモスト大学で読み、他の資料にもふれることができたことである。[この *Life & Letters* はその後、新島先生永眠九十周年の時に同志社大学出版部より復刻された。ペーパーバック印刷の必要性について上野総長に説明したり、本の装丁やその他復刻企画にケリー・北垣・井上先生らと共に加わらせ

ていただいた。この本の翻訳が北垣宗治先生によって完成し、「新島襄の生涯と手紙」と題して『新島襄全集』第十巻になっている。』新島先生ご自身の手紙だったので、ニュートン・グランドで学ばれた先生の若い日々がよみがえってくるような感動をもってそれを読むことが出来た。本物に接することが関心をもつための大きな動機となることを確信したわけである。新島先生の日本語の書簡、毛筆の書簡は判読するのが難しく、活字になっていても難しい漢字や表現法があつて、理解することが難しい。我々にとってこの違いはおもしろいことであるが、英文書簡はそのまゝ理解出来たのである。私が新島先生を偉いと感じたのは、自筆のノート、特に数学と英文のノートが丁寧に整理されていたことと、日本の文化・歴史を正しく理解し、アメリカ人に英語で正しく伝えようとしたこと、新しい言葉、新しい文化、新しい宗教を受け入れられたことである。また先生がまさに国際交流を最初に行し、我々に多くの資料を残していただいていることに気がついた。現在のそのような情報のなかった時代におけるパイオニアとしての先生の観察力と表現力に感心するばかりである。同志社創立者の一人新島襄が他人でなく、身近な存在となつて、新島先生がそんな方であつたのか、では、もっと新島先生についての事実を明らかにしてみたいと、新島先生に関心を持つようになったわけである。

新島研究が体系化されていく中で若い人が感じる感情的な山がより具体的になり、若い人にとって『新島研究』がその山を越える引金の役目を果たせるようになっていくことを望んでいる。(大学工学部教授)

新しい皮袋・新しい酒

坂 本 武 人

還暦も間近という年齢のせいもあるのでしょうか、最近、とみにいろいろな事柄に心を動かすことが多くなってきました。キャンパスを往き来しているときも、その美しいただずまいにふと立ち止まり「ああ、しあわせだなあ」としみじみと思いめぐらしている自分を発見することがあります。

私が入学した頃に比べると同志社には実に数多くの建物がたてられています。そして、その全てが、新島先生ご存命の頃からのものとはよくマッチしているのです。

同志社第二世紀の発展と飛躍に向けて開発・建設された田辺キャンパスも同志社の伝統を受け継ぎ、新しさの中にも重厚さを漂わせ、新島先生の遺志を伝えるにふさわしいものとなっています。

年々、おびただしい数で流入する新しい酒（学生）にふさわしい新しい皮袋を、ほどよく準備し、提供する「すばらしい学園同志社」！とたたえることに、天上の新島先生も決して異を唱えられることはないかと確信します。

同志社はたしかに美しい、そして実に素晴らしい。しかし、現在の同志社は百年前、生前の新島先生が思い浮かべていた理想像とはかならずしも一致するとはいえない面もあるように思われます。

新島先生は鎖国制度の下に置かれ、近代文明の恩恵からほど遠い存在の日本と日本人を救済したいとの一心を、その生涯の目的とされました。そして、百年、いま、日本は、同志社のキャンパスに象徴されるように物質面、経済面、すなわちいわゆるハード面では世界のどの国にもひけを取らないほどになり、全ての人が近代文明を享受できている国になっています。

貧しさと、それにもとづく不自由から日本および日本人を解放しなければならぬとの使命感にもとづき近代科学の教授・伝達を促す機関としての同志社の創立を図られた新島先生は、現在の豊かな日本を天上よりご覧になり満足の意を表わされているにちがひありません。

しかし、先生の目指された同志社は、近代科学の粋を集め、その最

先端を教授しうる学園であると同時に、いや、それ以上にキリスト教の精神のみなごった学園であることを念願されていたのであります。

華麗なる同志社のいまある姿が形づくられる核となり、礎となった基金は、一八七四年一〇月に開催されたヴァーモント州ラットランドにおけるアメリカンボードの第六十五回の年次大会における新島先生の「私はキリスト教主義の大学設立のための基金をえることなしには日本へ帰ることができない。それをえるまでは、私はこの場所に立ちつくすつもりである」との熱涙あふれる一途な訴えによつて集められた五〇〇〇ドルでありました。(加藤・久永共著「新島襄と同志社教会」)

新島先生にとつて同志社はキリスト教主義を基本理念にする教育を行う学園であり、宗教と科学の両面から日本および日本人の救済に貢献できる教育機関でなければならなかつたのです。そのため、先生は帰国されるや早々に、デイヴィス先生などと共に、神への熱い祈りをもつて同志社英学校を開設され、翌年の十一月、十二月には、同志社の教員、学生への伝道を主たる目的とする三つの公会(教会)を設立されました。

新島先生の設立された学校と教会は共に神の御名によつて建てられたものであり、先生の日本および日本人の救済という理想を実現するためにはなくてはならない車の両輪であつたといえます。このことは、あの有名な「自由教育自治教会両者併行邦家万歳」という言葉に集結されています。そして同志社創立一〇周年を記念して建てられた礼拝堂(チャペル)の定礎式における先生の式辞の次の言葉にもよく示されています。

「此の礼拝堂の定礎式を執行する祈禱を、神に捧ぐる前に当り、此堂

設立の事に付き、いささか我が意をのべんとす。そもそも、教育は宗教と密接の關係あるものにして、教育の基本は宗教にありと謂うべし。我が同志社教育はキリスト教と密接の關係あるものにして、今日この定礎式を行い、これを神に捧献するは、後來我ら大いに喜ぶべきことなりと思う。すなわち此の礼拝堂は、わが同志社の基礎となり、また精神となるものなればなり。今日此の堂を神に捧ぐることを得るは、真に進歩をあらわすものと謂うべし。此の堂はこれ実にわが日本人に大いなる關係を有するものなり。わが礼拝堂はわが日本国に大關係あるのみならず、わが生徒のこれをもつて精神となすべきものなり。」

二百年の大計のもとに、新島先生によつて開設された同志社は、先生が神の御許に召されて百年の歳月を経る中で、すばらしいキャンパスを作り上げてきました。そして、それは、先生の遺志を表現するたゞすまいをみせています。そして、この古くて新しい皮袋にいま、新しい酒がなみなみに注がれ、かつてない賑いをみせています。

しかし、果たして、ここに集うものたちのどれだけが新島先生の高い理想を受け継ぎ、神の大いなる愛に目ざめるものとなつていゝでしょうか。

すばらしいキャンパスのたゞすまいの中で「しあわせだなあ」と感じるとともに、その一木一草、一堂一字に新島先生の心と神のゆたかな愛のあることを知り、それを自からのものとし、この日本の中にいや世界の中に発展させる人材の養成を図ることこそ、私たち同志社人に課せられた課題であるといえます。

新しい皮袋に、芳醇に満ち満ちた新しい酒を醸造する使命を、このしあわせの中で再確認しようではありませんか。

(女子大学教授)

自閉化の打破を

今年の夏、日本のマスコミは、宮崎某の連続幼児誘拐殺害事件の報道でわき立った。余りにも冷酷残忍な手口が次々に明らかにされ、多くの評論家が登場して、小児性愛・性倒錯・嗜虐性等々の精神分析用語が溢れている。特に私が共感したのは、作家石川好が、「メディアの犯罪」として、野放図なエログロビデオの洪水に毒されている現代日本の世相を究明し、映像の中に埋没して、虚像の世界と現実の世界とが転倒していた悲劇的な犯人像を論じていた一文であった。（毎日新聞、八月十六日号）

このニュースは、あたかも四十四年目の終戦記念日と重なっていたが、この事件のためか、あの忌わしい戦争に対する反省記事が、今年ほど薄いと感じたことはない。しかしこの猟奇残酷事件と、日本人だけでなく三〇万人の犠牲者を出したといわれる戦争の惨事との間には、本質的なつながりがないだろうか。犯人を人々は口々に「およそ人間ではない」と批難し断罪しているが、非人間的、反人間的な規模でいえば、比較にならない冷酷な犯罪を、われわれ普通の日本人が、

熱狂的な歓呼の渦巻の中で平然と犯した事を忘れてはなるまい。

当時の事をあとから冷静にふり返ると、全く国民全体がどうかっていたとしか言いようのない異常な錯乱状態にあった。連日連夜流される戦勝の虚偽報道と、戦意昂揚の熱に浮かされ、戦争の実像は隠され、政府が流す虚像の中でしか現実を考えようとはしなかった。あたかも宮崎がアニメの虚像の中にひたって、実人生を見失って、次々に犯行をエスカレートさせたような狂気の状態に、大多数の日本人が落ち込んでいたのだ。すべてが政府主導のもとにあるマスコミの流す虚像で塗り固められ、それを少しでも疑ってみる理性が麻痺させられていた。宮崎はビデオテープにかこまれた自室内で、自閉状態にあり、しかもそれなりの陰湿異常な快楽を感じていたらしいが、あの戦時下、病的な自閉的陶醉に陥っていたのは一億の国民であった。嘘で固めた大本営発表を、本当と信じた、いや信じようとしたのも、自閉国民のほかない自慰行為であったのであろう。このように考えてみると、宮崎の事件を、全く「異常」、「前代未聞」、「一般人とは無縁」な事柄と

小野 高 治

突き放すことのできないものを感じるのである。

新島教育について書こうとして変な事から始めてしまったが、同志社教育で最も力点が置かれるべきことは、国境を越え、イデオロギーや専門を越え、あらゆる従来の固定観念を越えた自由な発想を尊重して、自閉化する事のない開達な教育環境を押し進めることである。建学以来百年以上も経つと、自然に過去の伝統や遺産によりかかり、新機軸を打ち出すことが容易でなくなるものだ。たとえば大学の学部間や、専門と一般教育の間、教員・職員・学生の間、今出川と田辺キヤンパスの間、学内諸学校間等に、実に多くの障壁が立ちはだかつている。元来分権的なのは同志社の伝統であり、組織運営上の不能率があつても、それは民主主義のコストとしてあまり深刻に考えることは

ない。それより問題なのは教育内容の充実に根気よくとり組む主体的な姿勢である。知識教育面の充実はもとよりであるが、より根本的には精神教育の面である。現実には宮崎のような極端な行動に走る者はいなくても、彼を生みだした文化的、社会的条件は、今日の日本の若者の間にどんどん広がっている。あんな奴は人間ではない、例外的な存在だと責めたてる人々の口ぶりには、自分を安全圏においた上で、好奇と冷笑と優越感で指弾している態度が見受けられる。しかし、この事件は決してひとつではない。われわれ自身が自閉化のワナの中に閉ざされて、自己満足していないかどうか、痛切に反省すべき時であろう。

(大学名誉教授・新島学園女子短期大学教授)



新島襄の掛軸の影本を頒布

新島襄の漢詩・詩歌三点を複製し頒布しています。

◎掛軸(影本)

一幅 八、〇〇〇円 (送料三六〇円)

(H)「男子決志馳千里 自嘗苦辛豈思家」

却笑春風吹雨夜 枕頭尚夢故園花」

慶応元年三月ワイルド・ロウヴァー号船上で作られた詩を明治一六年正月改めて浄書された。

(I)「不止月下併能越 跋涉八州是我分 壮図却促男児涙 滴々瀧為縷々文」

明治二二年一二月新潟伝道に従事していた卒業生広津友信におくられた詩。

(J)「いしかねも透れかしとて一筋に」

射る矢にこむる大丈夫の意地」

明治二三年一月五日「送歳の詩」と同様大磯百足屋で詩まれた和歌。

同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入る

電話(〇七五)二五一—三〇三七・八

新島初子のこと

「縁は異なもの」という。

戊辰戦争の時米沢軍の参謀をつとめた甘糟継成の孫が、十一歳で孤児となり、叔父に育てられ、新島襄の没後その妻八重の養女として迎えられるという、小説にでもなりそうな半生を送った。この異数の運命の主が、広津友信夫人となった初子である。

甘糟継成は、米沢藩中興の英主上杉鷹山の事績をまとめ『鷹山公偉蹟録』の大著を著した歴史学者で、『西洋通紀』『俄羅斯戦記』『亜米利加国史』などの著書もあり、藩内きつての開明的な学者であった。戊辰戦争に突入する以前から、西洋の学術文化に倣う必要性を痛感していた藩医たちが、英学中心の洋学校設立を藩当局に建言すると、継成はその枢要な後援者の一人となった。この甘糟を根っからの英学信奉者にしたのが、福沢を手伝い慶応義塾で英学を教授していた吉田賢輔である。

江戸生まれの吉田は、田辺石庵について儒学を修める。江戸安中藩邸で生まれた新島襄も田辺塾で石庵の子太一に師事する。二人は田辺

塾同門の誼で少年の頃からの知己である。石庵に師事した吉田は、さらに古賀謹一郎（茶溪）の門に入り、謹一郎が頭取の蕃書調所書記となり、やがて外国奉行支配調役並に進み、慶応三年には古賀の推挙で儒者勤方となる。

松野良寅

米沢藩の江戸勤学生は古賀塾修学と定められていた。古賀塾が取り持つ縁で吉田は米沢藩士との交遊が広がる。明治二年版籍奉還の直前に、甘糟継成は「新保勘左衛門」の変名のまま上京、麻布の上杉邸に起居しながら新政府への出仕のチャンスを探っていた。吉田を知り、その仲介で福沢諭吉や小幡篤次郎とも知己の仲となり、勝海舟の聲咳に接し、さらにはイギリス公使館付通訳官A・G・G・シーボルトらとも交遊を結ぶ。こうして英学が時代の要請であることを悟ると、十四歳の長男篤郎を米沢から東京へ呼び、吉田の世話で慶応へ入学させる。その頃藩費留学生の内村良蔵、平田東助らが上京して来て麻布邸に起居するようになるが、甘糟の幹旋で留学生の英学指導を条件に、吉田は母と妻を伴い麻布の上杉邸に住み込むようになる。数か月の期

間ではあったが、この間に吉田夫妻と甘糟父子の關係は極めて親密なものとなり、誠実利発な鷺郎に惚れ込んだ吉田は、指導にも熱が入り「竹（竹太郎・鷺郎）が面倒を見られ候事それはそれは一通之事にあらず、誠に仕合せに候。朝から晩まで参り実に吉田夫妻子供のように思ひくれ申し候。」（『甘糟備後継成遺文』）という具合で、鷺郎の進歩は著しく、明治三年八月大学南校の貢進生に選ばれる。その頃継成は待詔院出仕が決まるが、持病が悪化して十一月依願免官、帰省療養の甲斐もなく三十八歳の生涯を閉じる。甘糟家には十五歳の鷺郎と八歳の三郎が残され、家事万般の切り盛りは継成の妹春女が引き受けるが、元侍組の甘糟家もどん底の生活に追い込まれる。この時、在京修学中の鷺郎の後見役を勤めたのが吉田賢輔夫妻である。

鷺郎は、大学南校時代、小村寿太郎・杉浦重剛・三浦（鳩山）和夫らに伍して最優秀のクラスにその名を連ねている。（『東京大学百年史』通史一）その後鷺郎は大阪外国語学校教諭に就任、岡山県津山町出身の手代木中枝と結婚、明治十四年に長女の初子が誕生する。

明治十五年八月、新島夫妻は米沢・会津方面に伝道旅行に出るが、同月二十一日甘糟家を尋ね、春女から米沢の歴史や風俗・民情などについてる説明を聞いている。（『新島襄全集』第五卷「遊奥記事」）この一件から推しても甘糟家と新島家の交遊関係があったことが裏付けられる。吉田の仲介のほかに八重子が会津人という親近感も働いたことだろう。知性と芯の強さを併せ持つ春女の話聞いた新島は、米沢人について「一般に男子は怠惰にして女人は勉強する殊に甚だし」と書き記している。

初子誕生後間もなく鷺郎は広島に移り、一、二年後に神戸に赴任す

る。新島夫妻は米沢・会津方面の伝道を終えて東京・横浜を経て神戸に上陸、明治十六年、鷺郎夫妻の家を尋ねている。この日、米沢や会津の印象がまだ消えやらぬ新島夫妻は、三歳になった初子の成長ぶりを語る鷺郎夫妻の姿を見て感無量だったに違いない。

初子が就学期を迎える明治二十年頃、鷺郎は東京に移るが、新島没後一年三か月、明治二十四年四月中枝が急逝、病身の鷺郎は幼い娘二人を抱えて途方に暮れる。長女の初子は岡山の母の実家手代木家へ、次女のお子は米沢の叔父甘糟三郎家へ引き取られる。が、中枝の没後一年、またまた悲運が襲って来る。明治二十五年三月、妻の後を追うように鷺郎が亡くなる。三十七歳。甘糟本家は絶え、孤児となった十三歳の初子と五歳ののお子は叔父の三郎が引き取り、自分の子として入籍、実子の勇雄・速水兄弟と一緒に育てることになる。三郎は機屋を家業としていたが、武士の商法で商売はうまく行かず、苦しい家計の中で子供の養育はいつさい春女に任されていた。

明治三十年、福島・米沢間の鉄道敷設工事が進んでいた頃、新島八重子が十数年ぶりに米沢の甘糟家を訪ねて来る。夫妻の没後七年、兄山本覚馬も親交のあった吉田賢輔も、もうこの世にはなく、八重子はすっかり年頃の娘に成長している初子に再会して我が子とも思えたに違いない。一方春女も、八重子を相手に甘糟家の窮状を語り甥三郎の子供達の将来を考え、初子を八重子の所望に任せる決意をする。

こうして明治三十一年春、初子は八重子の養女として京都に移る。神の導きとでも言おうか、不思議な糸に引かれながら、初子はやがて新島襄の愛弟子広津友信の妻として後半生を生き抜くのである。

（山形大学教養部教授）

ある旅日記から

私たちの学園（新島学園女子短期大学）では、開学以来毎年、大学祭を十一月の初旬に行なっている。名付けて「裏祭」。そろそろ上州名物空ツ風の吹きすさぶ季節である。七回目を迎えて今秋は同志社クロバー・クラブの在京メンバーから参加の申し込みがあった。張り切りざるを得ない訳となる。

前夜祭には「裏祭実行委員会」の赤いハッピをまとった面々を先頭に、一大（？）仮装パレードが高崎市が目抜き通りに繰り出してゆく。中には羽織に袴、素足に高下駄、腰に竹刀を横たえて颯爽と行く女子学生たちもある。新島裏が藩主板倉に随行して初の上州入りをした當時を偲んでの心意気だろうか。剣道部かと思えば将棋クラブだったりして楽しい。はじめは目をパチクリさせていた市民たちだが今では市民たちに親しまれるようになった。「ねふた」をかついで練り歩く大衆文化研究会の大織りには東北出身の市民たちから声がかかる。

ところで「裏」という名前である。新島裏は在米中も、また帰国後も、英文書簡にはジョセフ・ハーディー・ニーシマと署名した。この

高道基

ファースト・ネームのジョセフに「裏」という和名をあてたのは同志社五〇年史によれば松山高吉であったという。松山は越後糸魚川の生まれ、一八六九（明治二）年京都に出、白川家学館で国史・格式を学び、また神山四郎について経学を修めた。さらに東京に移り国学および和漢の史学を研究、のち一八七二（明治五）年神戸に赴き、D・C・グリーンの下で英訳の聖書を学ぶうち回心、グリーンから受洗、摂津第一公会（現神戸教会）の設立メンバーの有力な一人となっている。のちその国文の素養を買われてヘボンやブラウンらに乞われ、日本最初の文語体聖書の完成に力をつくした人物でもあったから、「裏」というまことに適切な和名を考えだしたのも頷づける気がする。ちなみに裏とは「成し遂げる」という意味をもつ。松山は一八四六（弘化三）年の生まれであるから新島より僅かに年下であり、新島を「君」づけにして呼ぶことの出来ただ一人の人であった。裏の帰国時彼はすでに神戸のキリスト教会の重鎮であり、帰国した新島を横浜で迎えたのも彼であった。

話がとんでしまうが、上州に住んで見て松山の故郷越後は隣県である。「上・信・越」と併称されるほど群馬・長野・新潟の三県は一つの文化圏を形づくっているように思える。新島から「君にコンフィデンスを置く」と言われ、その言葉の重みを非戦の主張を貫くことによつて生き抜いた安中教会牧師の柏木義園ももと越後の人であつた。新島が最晩年、上・信・越地方を伝道の良田沃野とし、ここに最後のビジョンを燃やしたのも分るように思う。

ところでこの松山高吉という人、九〇年の生涯の約半分を同志社のために貢献しているが、その割には従来の同志社史関係出版物や新島襄の伝記には断片的にしかあつたかわれていない思いがする。松山の遺稿の中の「旅日記」から見れば、彼は新島にとつて全幅的に心の許せる同年輩の友人であつたようである。

新島の帰国を横浜に迎え午餐を共にした宣教師たちの中に松山があつたことは先に少しふれた。彼はこの時新約聖書翻訳のため、横浜に「寓居」していた事情にもよるのだろう。新約聖書翻訳完了後は再び神戸に戻り、一八八〇（明治十三）年、神戸教会牧師に就任、六月四日の就任式には新島が牧師勧告を行なっている。以后新島と共に、あるいは単独で高梁、岡山、今治、郡山（大和）などの教会設立式に赴き、牧師勧告や講演に活躍している。郡山の帰途など「新島氏ト同道十二時大阪ニ到リ荒木屋ニテ蕎麦ノ饗応ニアフ」と録しているのも面白い。松山は一八八四（明治一七）年今度は旧約全書翻訳者に選ばれ、再び横浜に移るがその途次新島宅に宿泊、盛大な送別の宴が開かれてゐる。一八八七（明治二〇）年旧約全書翻訳完成によつて同年末、平安教会に迎えられ、同時に「同志社病院」及び「京都看護婦学校」

開設発起委員となつて同志社との関わりを深くした。詳細に迫る誌面はないが、新島との関りで注目してよいのは、新島の昇天（一八九〇年一月二十三日）直後の二月三日。

同志社ノ依頼ニ応ジ日日図書館総長室ニ出張シテ校内ノ信仰ヲ励マシ、且ツ生徒ノ聖書研究ヲ助ケ（当時平安教会ニ牧師タリシガ嘗テ新島総長ヨリ己ニ代テ校内布教ニ尽力シ且ツハ国史国文ニ助ケヲナサン事ヲ屢バ依仗セラレタレド教会ニ故障アリテ応ゼザリシガ、総長既ニ世ヲ辞サレタレバ辞ムベキニ非ズ、遂ニ教会ニ説テ社員教授面会ノ請求ヲ容ル（句点、圈点高道）

と記せられてあることである。松山と新島の交情の深さが読みとれはしまいか。

松山は新島の病篤しの報に接し、一月二十三日第一番の汽車で大磯に駆けつけたが、時すでに遅く、午後二時二〇分新島は永眠、その夜はその枕元に座し、翌日第二番の汽車にてその遺体を守つて帰京、一月二十七日同志社礼拝堂における葬儀では司式を掌どつてゐる。当時の同志社における彼のポジションの重さを伺うことができるであらう。

松山は米国宣教師との交誼を重んじ、しかも同志社の建学の趣旨の冒すべからざることをしばしば提言している人物であつたから、新島没後の校長後継者たちと宣教師団とのゴタゴタを思うとき、むしろ松山自身がその任に當つたらと思うことさえある。（松山高吉の旅日記は、溝口靖夫「松山高吉」巻末に収録されている）

（新島学園女子短期大学学長）

田辺キャンパスと植樹

末 光 力 作

新島襄先生は優れた教育者、伝道者として知られているが、先生が科学者であったことは世間では余り知られていない。先生は数学、地質鉱物理学の領域で優れた見識を持っておられたし、植物の分野でもかなり大きな貢献をされている。筆者はこれまで「新島襄先生と植物」と題して先生の生誕第一四五回記念会（一九八八年二月一二日）に講演させて頂き、それが活字にもなっているので、（新島研究七二号）できるだけ重複は避けたいが、先生は国の内外から植物の種子や苗を集め、栽培し、人々に分ち与え、植物を通じて人との交わりを深められた。トマト、アスパラガス、イチゴといった今日私たちの食卓になくてはならない西洋野菜の普及に、先生が貢献しておられるのはまことに興味深い。

同志社大学田辺キャンパスも開校以来はや四年の月日が過ぎようとしている。校庭の樹木も少しずつ大きくなって来たし、芝生の緑も美しさを増して来たことは嬉しいことである。この夏、ハーバード大学へ行く機会があったが、街に近い大学のキャンパスに大樹が繁り、リ

スがチヨロチヨロと可愛い姿を見せていた。同志社大学の有名な大学に見られる様に、内容外観ともに風格のあるものにしたものである。そこで筆者はつぎに述べる新島先生ゆかりの樹木を植えて田辺キャンパスを飾ることが出来ればと考え二、三の植物を紹介しよう。

（一） カタルバ

此の木は五月の下旬に可愛いベル状の白い花をつけ、秋にはサヤエンドウの様な実をつける。アメリカのニューヨークランドでは初夏の訪れを告げる花として喜ばれている。新島先生にとつても「思い出の樹木」であつたに違いない。現在、熊本には徳富蘇峰、蘆花を記念して市教育委員会所管の徳富記念館が建っている。この場所は蘇峰が設立した「大江義塾」の跡である。筆者の手元に野水一郎館長の書かれた一文があるのでここに紹介しよう。

名称 カタルバ (Catalpa) 和名アメリカキササゲ 京都、同志社の創立者、新島襄氏が明治十年代にアメリカから種子を持ち帰り、

徳富蘇峰の父、湛水翁（一敬）に贈ったという由緒のある木。香りのよい白い小粒の花が蘇峰と恩師、新島の師弟の友情を物語っている。原産はアメリカ南部で、日本には明治の中ごろ移入されたらしく、熊本では数本しかない珍しい木である。落葉樹で約二十メートルの高木になる。花の見ごろは五月二十日前後である。現在、熊本市徳富記念園にあるカタルパの木は二世で、幼木の三本は三世である。

文中、「明治十年代にアメリカから種を持ち帰った」とあるが、これは誤りで、新島先生は一八八〇（明治十三）年、アメリカの種苗会社から種と栽培のマニユアルを取寄せているが、この種に由来すると見るべきであろう。さて、徳富記念館において種を分けてもらい、カタルパのお里帰りをさせたいものである。

(二) コウヤマキ (umbrella pine)

アメリカ、マサチューセッツ大学のロードデンドロン・ガーデンには二本のコウヤマキが亭々と聳えている。この木は一八七六（明治九年）、札幌農学校開校のとき来日し、有名な「ボーイズ・ピ・アンビシヤス」の名言を残したW・S・クラークと関係がある。新島先生とクラークとの関係は先生がアーモスト大学に入学した一八六七（慶応三年）に始まる。その年クラークは同じアーモストに新設されたマサチューセッツ農科大学の学長に推薦された。その後、学問並びに精神面でも先生はクラークの影響を受けている。注目すべきは二人は太平洋を隔てて日米間で植物の交換をやっていることである。

さて、このコウヤマキをクラークの求めに応じて一八七七（明治十

年、先生が種を送り、それが育って今や喬木となり、その偉容はクラーク、新島の師弟愛を物語っている。クラークは札幌からの帰路、京都へ立寄り、同志社を訪問して、学校建設に悪戦苦闘している先生を激励し、建物一つ一つに若干の寄附をしている。さらに帰国後、教会で講演して同志社の為の寄附金を会衆にアピールし、集まった百ドルで書籍を購入して同志社に寄贈したのである。私達同志社人はクラークの寄せた好意を決して忘れてはなるまい。さて、このマサチューセッツ大学にあるコウヤマキも種を頂いてお里帰り出来ないものであるうか。私は可能であると思っている。

(三) ユーカリ (Eucalyptus)

ユーカリはオーストラリア産の可愛い小動物コアラが好んでその葉を食べるので知られているし、またパレスチナの代表的樹木でもある。明治十年頃日本に移入されたが、津田仙が植えた木から東京に拡がったようである。新島先生は津田と親交があったから、種か苗を彼から得ていたことが充分想像される。一八七八（明治十一年）の夏、先生は岸和田伝道を行っているが、その時持参したのがユーカリの苗であった。これが岸和田出身の山岡邦三郎の家に植えられ、山岡家のシンボルとなったが、残念なことに昭和九年の室戸台風で倒れてしまった。山岡はユーカリを近所の岸和田中学校の校庭に植えたが、これが育って長い間、美しいユーカリの並木があったという。ところが学校の改修工事で大方は伐採されたという。筆者は現地に行ったことはないが、少し残っているなら種を頂いて田辺キャンパスで育てたいものである。

(四) レバノンシダー

田辺キャンパスには「香柏館」という面白い名の建物がある。その名前は聖書に由来しているが、香柏はレバノンの樹木中最も美しい木で船の帆柱にしたり（エゼキエル二七・五）、また貴重な建材でダビデはこれで宮殿を造営した。（歴代上二三・四）また女性美の表現として「その姿はレバノンのごとく、香柏のように美しい」（雅歌五・十五）とある。香柏はマツ科ヒマラヤスギ属の植物で、レバノンシダー（*Cedus libani* Loud）である。ひとつこの木の種をパレスチナからレバ

ノンから持ってきて香柏館の前に植えたいものである。また聖書に出てくる植物を集めて「聖書植物園」を造るのも同志社らしい計画ではなかろうか。

田辺キャンパスにカタルパとレバノンシダーを植え、ユーカリの並木、コウヤマキの木影を造りたい。そして新島先生とクラーク、徳富、山岡との師弟愛を永く語り継ぎたいものである。そのことは同志社が標榜する教育の国際化にも通ずる大切なことと筆者は思っている。

（大学工学部教授）

新島襄関係文献（抄）

- | | |
|--|-------------|
| 「新島襄全集」全十巻（刊行中） | 同 朋 舎 出 版 |
| A. S. HARDY, <i>LIFE AND LETTERS OF JOSEPH H. NESIMA</i> | 同志社大学出版部 |
| 「同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意」口語改記並原文」 | 同 志 社 |
| 森中章光編「新島先生書簡集」正・続 | 同 志 社 |
| 同志社編「新島襄書簡集」一岩波文庫 | 岩 波 書 店 |
| J・D・デヴィス著・北垣宗治訳「新島襄の生涯」 | 小 学 館 |
| 「新島先生記念集」 | 同 志 社 校 友 会 |
| 「明治文学全集第 四十六巻」新島・植村・清沢・網島集」 | 筑 摩 書 房 |
| J. D. DAVIS <i>JOSEPH HARDY NESIMA</i> | 同 志 社 |
| 森中章光編著「新島襄片鱗集」 | 丁 字 屋 書 店 |
| 森中章光編著「新島襄先生詳年譜」 | 同志社・同志社校友会 |

- | | |
|------------------------|-----------------|
| 永澤嘉巳男編「新島八重子回想録」 | 同志社大学出版部 |
| 徳富蘇峰著「新島襄先生」 | 同志社大学出版部 |
| 魚木忠一著「新島襄一人と思想」 | 同志社大学出版部 |
| 岡本清一著「新島襄」 | 同志社大学出版部 |
| 渡辺実著「新島襄」 | 吉 川 弘 文 館 |
| 森中章光著「新島襄先生」 | 同志社新島研究会 |
| 加藤延雄・久永省一共著「新島襄と同志社教会」 | 同 朋 舎 出 版 事 業 部 |
| 吉田曠二著「新島襄―自由への戦略」 | 新 教 出 版 社 |
| 同志社社編 | 同 志 社 |
| 「同志社百年史 通史編Ⅰ・Ⅱ」 | 同 志 社 |
| 「同志社百年史 資料編Ⅰ・Ⅱ」 | 同 志 社 |
| 和田洋一著「新島襄」 | 日本基督教団出版局 |
| 同志社社史資料室編「創設期の同志社」 | 同志社社史資料室 |
| 同志社社史資料室編「追悼集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」 | 同志社社史資料室 |
| 雑誌「新島研究」 | 同志社新島研究会 |
| 雑誌「同志社談叢」 | 同志社社史資料室 |

新島襄先生祖先の墓

半田喜作

私は教師として小学校、中学校へ三十数年勤め、その後安中市社会教育課へ非常勤で勤めた。安中市以外の学校へ勤めていたため故郷である安中については、ほとんど知らなかった。故郷を知らなくてはと思ひ、焦点を安中市郷原にしぼって調べた。

毎日ノートとカメラを持って村を歩いた。県で行なっていた古文書教室へ入会し、古文書の勉強も平行して行なつた。郷土史を調べるには地域にある古文書が読めることが第一の要件であつた。

安中市郷原というところは、かつては一村であつて、中央を中仙道が通つていた。今は国道十八号線になつた。西に妙義山、浅間山がそびえ南には碓氷川が流れている。現在は戸数五五〇戸、人口二千たらずである。蚕の盛んなところであつたが、工業化が進み勤め人が多くなつてきた。

郷原を古代、中世、近世、現代に大別した、神社と寺、石造文化財、城趾、産業、交通、人物史、教育、戦没者、文芸、民俗民話、名種団体、地名などの項目に分けて調べた。古文書や碑文を解説するとも

に、古老その他の人に尋ねた。

多くの人と話し、多くの文化財にふれ、祖先の息吹きを肌で感じ、路傍の石にも親しみをおぼえるようになった。知らなかった故郷にたくさん文化財があるのに驚いた。立派な文化財がある安中市郷原を見直した。調べた資料を一人で持っているだけでは、宝の持ちぐされと思ひ、「安中市郷原風土記」と名づけて刊行した。郷原の文化財のなくなることを恐れてのことであつた。

調べてみて判然としたことは、新島襄先生の祖先の墓があつた。祖先の中島と言ひ郷原に住んでいた。その墓は中仙道の傍で妙義山を正面に見、碓氷川のほとりで、安中市郷原の西の方にある。

新島襄先生祖先の墓

墓の正面

松郷斉一志翁の墓



新島襄先生の曾祖父の墓 中島忠七の墓

向って東の面、

俗称中島忠七天保十五申辰

三月十日没 吉令^船九十歳

安中藩 新島氏建之

向って西の面には

父のみまかりけるを送りて

ちる花をおしまぬ風や

かぜ白む

曲江

とあった。

中島忠七という方の墓である。この方は弁治の父で、新島襄の曾祖父にあたる。忠七は郷原で農業をしたり、寺子屋をしたり、盆画をしたりしていた。九十歳の高齢で、天保十五年、(一八四四年)に亡くなった。安中藩新島氏とあるのは弁治で、新島先生の祖父である。曲江という雅号で俳句をしていた。弁治の時に改姓し、安中へ出て板倉公に仕えたのである。墓は安中市妙光院に新島襄先生の弟の雙六と並んで建っている。

多くの人に新島襄先生の祖先の墓のあることを話すとともに、乞われれば案内し、説明をしてやっている。「新島襄先生祖先の墓」という案内板を建てた。

また私自身新島襄先生を知らねばと思い、新島襄全集、新島襄伝、同志社時報、新島研究、同志社談叢、新島家の漢詩、新島氏家統記、上毛教界月報などを読んだり、調べたりした。

さらに妻や娘とともに、東京神田の生誕の地へ行き往時を偲んだ。大磯の終焉の地では、どんな思いで亡くなったかを妻と話した。函館の碑を見るとともに富士字之吉の墓参もした。京都の若王子の墓参をしたり、同志社大学へ行き良心の碑を見せてもらったりした。ゆかりの地へ行けば、先生の息吹がじかに肌を感じられ身のひきしまる思いがするのであった。

いまは新島襄先生の教えを受けた、安中に関係のある人々を調べている。廃娼^{はいしょう}で全国のさきがけをし、群馬県の原動力となった、湯浅治郎は同志社の経理面で盡した。新体詩のさきがけで、哲学博士、図書館、山水などで文人として親しまれた、湯浅半月。徹底した反戦の牧師柏木義円。新体詩、小説、短歌などで活躍した磯貝雲峰。また日本

ヘユネスコの資料を持ってこられた湯浅八郎らである。さらに湯浅一郎もいる。どの方もどの方もみなすばらしい。そして人権を尊重し、男女平等であるし、人の生命を大切にしている。平和を望み、平和になることを訴えている。これらの人々の考えのもと、思想のもととは新島襄先生である。

ある本で読んだのだが新島先生の言葉としてつぎのように言っている。

「人間はたゞ生活するばかりでなく、更に大なる目的のために生活するものであつて、人間の生活は畢竟高尚なる奉仕の為にするものであつて、人間の価値は奉仕する心の純潔と熱誠とによつて定まるもので

ある」と。

私のいままでの人生は、多くの人に世話になつて生きてきた。奉仕する人生ではなく、人に御世話になる方が多かった。これからは少しでも奉仕の心で生きたいと思う。どんな奉仕かが問題である。

幸いに私の故郷安中市には、偉大な新島襄先生がいらつしやる。その祖先は郷原で私の故郷である。さらに新島先生の教えを受けた安中の人々がいる。この人達を顕彰することは私たちに課せられた課題ではないだろうか。人間を尊重し、人権を尊重する、そして平和を愛することこのことが私達の道ではないだろうか。新島先生の教えを受けた人たちが活躍したような安中にしたいものである。(歴史家)



新島襄の色紙の影本を領布

新島襄の色紙三点を複製し頒布しています。

この色紙は、明治二年秋から二三年春にかけて、その心情を吐露された詩歌の遺墨の中から選んだ。

◎ 色紙(影本) 一葉 一〇〇〇円(送料一七〇円)

(A) 「時危思偉人」

明治二年一月徳富蘇峰の依に応えて揮毫されたもの。

(B) 「不止月下併能越 豈涉八州是我分

壯図却促男兒淚 滴々跋為縷々文」

明治二年二月新鴻伝道に従事していた卒業生広津友信に

おくれた詩。

(C) 「送歲休悲病羸身 鷄鳴早已報佳辰

劣才縱乏濟民策 尚抱壯圖迎此春」

明治二年一月一日大磯百足屋で新春を迎えて詠まれた詩。

同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入る

電話(〇七五)二五一一三〇三七・八

九十五歳の青春

——新島研究者の目標——

吉田 曠 二

「真理似寒梅敢侵風雪開」——新島襄のこの一句は、かれの死后 百年の今日でもなお力強くわたしたちを鼓舞してくれる。今の世の中からはたとえ認めてもらえなくても、それが真理であるなら、風雪を侵して開く、という樂觀的希望が作者の心にある。風雪にじつと耐えぬく勇気がわいてくる一句で、味わい深い。

平成元年の春、わたしが新島研究者として最長老にあたる有名な森中章光先生のご自宅を訪ずれたとき、同先生から、「この春、記念に墨書したものです」といって、右の一句を書にして贈られた。

森中先生は今年九十五歳になられたが、まだ青年のごときスピリットを燃やしつつ、新島研究を継続されている。京都岩倉のご自宅には、奥さんと二人ぐらして、自宅の周辺を毎日散歩されたり、教会の活動など精神的にもバランスのある生活をされている。年に数回、同志社で開かれる新島研究会や新しい新島会にも常連メンバーとして参加され、長老格として意見も発表されることがある。森中先生の新島研究は五〇年以上のキャリアがあり、しかも対象は新島一筋という力の入

れかたで、わたしなどまだ孫のような存在で足もとにさえ及ばない。そんなわたしに森中先生が新島と初期の同志社を語られるときの顔はヒューマンで、母校と校祖にたいする愛情にあふれている。九十五歳にしてなお気迫をもつて、新島に心を寄せられる先生の若々しさの秘密はどこから湧き出てくるのか？ 森中先生と対話しているとわたしも年老いてなおそうありたいという思いで一種のうらやましさを感じずにはいられない。

若き日、森中青年が同志社普通学校の門をたたいたのは明治四一年九月、広島 of 修道中学から編入試験を受け、同志社に入られた。当時は原田助が社長で、普通学校の教頭が波多野培根（勝山）先生であった。入学試験は簡単なペーパーテストと波多野教頭の面接でパスされたという。

波多野勝山は儒教育ちであつたけれど、新島先生に嚆望され、同志社に来てクリスチャンになった人である。後年、新島から遺言状をもつた弟子の一人で、その人生は新島によってしからしめられたとい

えよう。

波多野勝山は山口県津和野藩の出身で、萩に近い阿武郡出身の森中青年とは同県人である。同県人としての親近感には森中青年の心をとらえ勝山先生への信頼を深めることに結びついたとも思われる。

同志社で学ぶこと四年——森中青年は大正二年に同校を卒業し、山林殖産経営などにも着手したが、あるとき、若王子にある新島先生の墓前で、一念発起し、新島研究を志したという。

同先生の勝山への執着は、新島の書簡を中心に初期の同志社人の関係資料が日本全国各地の所蔵者の手元にあることがわかると、夜行列車に乗って、その写しをとりに出かけられた行動によつてもわかる。それは第二次大戦という物資不足の時代でも続けられている。

そのころの森中先生の熱意と行動を知って、激励した人が徳富猪一郎（蘇峰）であつた。蘇峰は戦後、新島研究のためにいつて一万円という当時では大金を森中先生に手渡ししている。それは財政的な面で、森中氏を勇気づけている。

蘇峰はジャーナリスト、新聞経営者として活躍した新島の門下生の一人で、かれもまた恩師である新島には死の直前まで思いを走せている。蘇峰は森中氏が収集した資料をも活用し、九五歳のとき長文の新島伝を執筆した。『三代人物伝』というタイトルの本に収録された『新島襄』である。それは堂々たる風格の文章で、秀作と思われる。

当時、森中氏が集められた新島関係の資料は、その量も多く、貴重なものである。とくに新島書簡などは、今では散逸したまま現物の所在さえわからないものがあり、森中氏が手写しされていなかったら、永久に陽の目をみることはなかっただろう。それだけに近年刊行され

た『新島襄全集』中の書簡編（Ⅰ・Ⅱ）に収録された森中先生筆写の書簡類は貴重である。

新島はすぐれた教育者ではあつたにしても、同じく幕末に外国へ航海した福沢諭吉に比較すると、たしかに独立した著作はほとんどない。しかし新島はエネルギーに手紙を書き続け、家族や友人、同志や弟子たちに送りどけていた。そこにはキリスト者として、教育者として、あるいは肉親に対する新島の思いが込められており、新島の思想と行動を知る不可欠なメッセージである。新島の生涯はその書簡にあらわれており、後世への貴重な文化遺産である。

わたしは戦時下の交通不便な時代、新島書簡を筆写するため、夜汽車にゆられながらも全国津々浦々を旅された森中氏の苦心を思い浮かべるとき、同氏をその行動にかりたてた動機がやはり新島の手紙にあふれるヒューマニズムの精神であつたと考えざるをえない。

新島の貴重な書簡は以前にも数種刊行されたことがあるけれど、今回は新島永眠百年を記念する数年前から、多くの同志社人の努力で英文書簡も含め一層充実した内容で刊行された『新島襄全集』第3・4・6巻。それらは新島の思想と行動を知る貴重な手がかりとして、同志社人だけでなく、広くさまざまな分野で活躍する人々に読まれることを期待したい。

最後に今一つ、森中先生の近況をお伝えしよう。同氏はなお意気盛んで、三つの目標にチャレンジされるという。一つは同志社の結社人の一人たる山本寛馬（会津藩士）をキリスト教に導いた一著——マルチンの『天道溯源』の現代語訳を出版すること、二つ目は『新島襄先生詳年譜』（森中章光編）の再改訂つまり決定版を刊行すること、三つ

目は人物研究に不可欠な「時代」を知るため、新島が生きた幕末・明治の「時代」を改めて学ぶことをあげられた。そのうちマルチンの『天道溯源』については、漢訳本などをテキストにして、すでに数冊のノートに現代語訳をすすめられており、そのノートをわたしにみせられたことがある。森中先生によると、新島はマルチンに会っており、その著作が山本をキリスト教にみちびいたわけで、それは宗教的にみれば、見えざる神の御手のみちびきと言わざるをえないとささやかれた。新島先生永眠百年を記念し、見えざる御手が森中先生の現代語訳刊行を実現にみちびかれるよう、切に祈りたい。

「九十五歳の青春」という文の再稿ゲラが同志社時報編集部から送られてきた直後、西大津のわたしの自宅に森中章光先生からも一通の書信が到着した。封を開いてみると、毛筆で「御多用中甚だ恐縮乍ら御来京の機に拙宅迄御立寄り下されば幸甚」とあった。

この夏(七月下旬)、森中先生のご自宅へお伺いしたときは、非常にお元気で、新島研究の三つの抱負などを力強く語られていただけに、その時は手紙について何とも思わなかった。しかし十一月三日帰京時に森中先生のご自宅を訪問すると驚いたことに九月に約二週間、心臓が悪くて入院されていたという。

早々に、居間でくつろいでおられる先生のお顔を拝見したところ、やはり、病気のため元気をなくされている様子であった。

お見舞方々、早々に退去すべくところ、わたしを引きとめられ、人生最後の希望として、第二次大戦の最中に執筆の『新島襄先生の生涯』を今一度、世に問ひ後世に自分が生きた証として残しておきたい、と静かな口調で語られた。先生のこの著作は日本人が書いた最初の本格

的新島伝ともいえる力作で、刊行を祝って徳富蘇峰と深井英五先生が好評の手紙を森中先生に送られている。その手紙を手に森中先生は音読しながら二人の先輩の希望を語られたが、とくに徳富蘇峰は「新島研究の進展は実に君の双肩にかかっている」と激励されており、森中先生も又、その期待に十分答える人生を今日まで歩まれてきただけに一瞬胸がつかまる思いを禁じえなかった。

先生がこの著作を刊行された、昭和十七年という暗い時代を思えば、戦時下の紙不足で刊行のご苦心は大変だったと想像できる。しかし森中先生の強烈な熱意で上・下二冊の『新島襄先生の生涯』が世に出たのである。

それ以来、四十七年の年月が過ぎ去ったけれど、森中先生の新島研究熱はおとろえをみせず、むしろその年輪によって充実されたことは誰もが認めている。四十七年前、つまり五十歳代の壮年期、森中章光先生が情熱をかたむけた『新島先生伝』は今日も色あせていない。いなむしろ、その後の新島研究史の流れからみれば、それは先駆的位置付けを失しなわれない古典とみて差しつかえない、と考えられる。

わたしは森中先生の古典的著作『新島襄先生の生涯』へ上下二冊を今回は一巻本として、後世のために復活させたいと心から願ひつつ目下出版社をさがしているところである。

森中先生のご長寿を祈りつつ、一九九〇年が『新島襄先生の生涯』の復刊の年でもあることを期待したい。(11月15日)

二九六〇(昭和三十五)年大学法学部卒業・一九六三(昭和三十八)年大学院法学研究科政治学専攻修士課程修了・朝日新聞名古屋本社勤務

奇しき御手のもとに

井 殿 園

JR安中駅は高崎から十キロ西にある信越線の小さな駅である。駅のすぐ前を中山道が通っている。今は国道十八号線、交通渋滞の中心としてひろく知られている。この駅前の狭い場所に小さなロータリーが設けられ、そこに高さ五米程の三角柱が立っている。一面に「平和

の使徒新島襄ゆかりの地」、他面には「非戦の先覚柏木義円ゆかりの地」と大きく書かれ、訪れる人々に安中の町を紹介している。

群馬県では「上毛かるた」が盛んである。特に最近、地域ごとに子供会や学校が熱を入れ、毎年競技大会が催される。そのかるたの一枚に「平和の使徒新島襄」がある。子供たちが新島襄を最初に耳にするのはかるたからであると言ってもよい。

この駅から西へ一キロ余り行くと町の中心の小高い丘の上に新島襄記念会堂がある。年々訪れる人が増すのは、新島先生への思いによるというよりも、大谷石造りの会堂の美しさによると言う方が当たっているかも知れない。種々の観光案内にも記されているからでもある。

この記念会堂は、湯浅治郎の提案に始まり、柏木義円との連携によ

り、内外の寄付を仰いで一九一九（大正八）年に完成した。工費は一九、八五六円と記録されている。その翌年の秋、新島先生召天三十周年を記念して献堂式が挙行された。

一九二三（大正十二）年には、この新会堂で「新島先生召天三三年記念伝道」が、金森通倫、小崎弘道、山室軍平を迎えて開かれた。求道者一三一名と報告されているが、恐らく来会者数ではないだろうか。

また一九二五（大正十四）年十二月から、「新島先生上州伝道開始五十周年記念伝道」が向う三カ年にわたって継続的に実施された。柏木義円は「新島先生上州伝道開始の精神に感応して起ちたいものである」と「上毛教界月報」紙上で諸教会信徒に強く訴えている。

「新島先生召天五十周年記念会」が、記念会堂で開催されたのは一九四〇（昭和十五）年一月であった。式辞は山室軍平が述べた。衰弱を押しての故からかその翌々月に山室は召天、最後の講演となった。湯浅半月、塚本道遠、岡田鉄蔵、湯浅与三、中山光五郎らが出席し、新島先生追悼の思いを語った。その個々の談話は残されておらず惜し



JR安中駅前に立つ案内柱

まれてならない。教会は山室の式辞だけにははるばる技術陣を招いて録音盤として残している。しかし彼の声は弱く、技術も今から見れば未熟、聴きとるには大変な苦勞である。

戦後になって、一九四九（昭和二十四）年一月、「新島先生召天五九年記念礼拝」が行われている。また一九五二（昭和二十七年）年夏、安中町と教会とが共催で、同志社より魚木忠一教授を迎え「新島先生を語る」と題して講演会が開かれている。当時この地方にもキリスト教ブームが押し寄せ、可能となった催しであったと見る事ができるだろう。

新島先生は一八七四（明治七）年十一月帰国され、直ちに安中を訪ね両親に十年ぶりに再会された。この時この地に初めて先生によって福音が伝えられた。このことを覚えて教会は、一九七四（昭和四九）年新島学園高等学校と協力して「新島襄帰国百年記念講演会」を、鶴見俊輔氏を迎えて開催した。既にもう十五年が過ぎた。

先生召天一〇〇年を前にして、一月二十一日午後、新島学園と共催で新築なった学園の礼拝堂で「新島襄召天一〇〇年記念講演会」を計画し準備中である。講師には同志社が井上勝也教授を送ってくださる。ひろく市民にも呼びかけている。

新島襄記念会堂は建築完成七十年を迎えた。樹木に囲まれてもその姿は内外ともに全く変わらない。今も日曜日ごとに会堂内で、完成時に求めたオルガンを使って礼拝が守られている。

会堂入口の上の大理石には、新島家の紋「根笹」が刻まれている。内部正面の講壇右側の壁に、湯浅一郎が描いた新島先生の肖像画が高く掲げられている。また左側の壁には松岡寿画伯による海老名弾正先生の肖像が並んでいる。

静かな午後、西日に色あいを強めるステンドグラスからの光を浴びながら、坐して新島先生の肖像を仰ぎみる。しばらくは近寄りたがいきびしさに、またしばらくは限りないやさしさに満ちた眼指しを交互に感じる。仰ぎみる自らの心の動きによって変わる。

安中教会に来て二十年を迎えた。十年前に新島先生が召天された年になった自分をこの像の前で実感した。何と若くして召されたことか。感傷にひたりながらも、今も生きて語りかける新島先生に励まされるのである。

新島先生の一命を賭しての出国、苦難に満ちた一年の船旅、ハーディ夫妻の愛顧をうけての十年の研鑽。それらは先生の強い意地、高い志にもよるが、終始さしのべられていた神の奇しき御手によるものと思う。

一八七九（明治十二）年六月、同志社第一回卒業生一五名を世に送

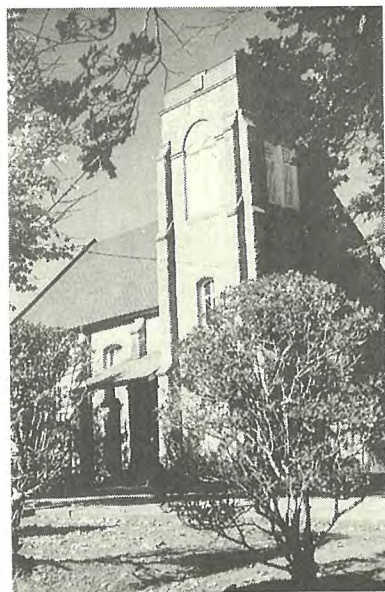


新島襄記念会堂内部正面

た結果生まれた安中教会の上にもさしのべられている。その故に今日あることを感謝せずにはおれない。私事になるが、父も私も二人の子らも、同志社神学部で学び得たことは不思議でならない。多くの方々の導きによることではあったが、何よりも奇しき御手の導きと思うこの頃である。

り出すにあたつて、先生は「行けよ行け、やすらかに！雄々しかれ！奇しき御手は諸君を導く！」と熱涙を注ぎ饒とされた。これは先生自らの上に常に重くさしのべられて来た神の御手に対する信仰からの叫びであった。

この奇しき御手は、先生召天後百年、変ることなく同志社の上にもさしのべられている。また同じく先生によつて初めて伝道された



新島記念会堂外観

追記―安中市は一九六〇（昭和三十五）年、新島先生召天七十年を記念して講演会を開催。やがて先生ご両親の旧宅を市で買取り保存しようとの運動が、湯浅正次氏（当時安中市商工会頭）らによつて始まり、旧宅保存会を結成、七百万円を全市民の寄附を得て現在地に改築修復した。落成式は近くの安中蚕糸高校体育館で行われ、時の新島学園高等学校校長岩井文男先生が「垣間見た新島襄先生」と題して講演した。併せて旧宅に設けられた「資料館展示室」に、同志社より多くの貴重な資料の貸与をうけて公開した。今も訪れる人は後を断たない。（一九五四（昭和二十九）年大学神学部卒業、一九五六（昭和三十一年）大学院神学研究科修了・日本基督教団安中教会牧師）

新島襄旧邸(遺邸)について

前 久 夫

はじめに新島襄の帰国からこの私邸に落付くまでの、彼の住まいの変遷を一瞥しておこう。

新島は明治七年(一八七四)十一月二十六日、横浜港に到着した。群馬県安中の両親の下で暫く過した後、東京に赴き翌八年一月横浜から船で大阪に向い、同二十二日河口与力町三番地に居住のアメリカン・ボードの宣教師M・L・ゴードン方に仮寓した。ここで半年近く過したのち、七月五日京都上京第三十一区下丸屋町四〇一番地山本寛馬方に移住、同十月借受が決まった同区新島丸頭町四〇番地の岩橋元勇方に移転、そして同九年一月、山本寛馬の妹八重と結婚、同十一年(一八七八)九月七日同区松陰町一四〇番地に新居を建築して、移転定住することになる。

この新居新築については明治十一年五月一日付で、上京第二十二区長宛に「屋宇建築届」が提出されているから、この時点で建築工事に着手したことは明らかである。この土地は華族高松保実の旧屋敷跡で、明治八年(一八七五)に新島が山本とともに「官許同志社

英学校」を開業した、ゆかりの地でもあった。九月初めにほぼ竣工し、さきにも触れたように同月七日に入居している。そして翌八日(日曜日)、この新居で移転最初の聖日を迎え、階下客室を集會室にして礼拝式を行っている。

この建築資金については、明治九年(一八七六)の三月ごろ、ボストンに住む友人J・M・シアーズより、住宅の建築費を贈られている。しかし新島は、私邸よりまず校舎・会堂の建設を先行すべきだとし、それらを実行し、その目途がついた段階で、ようやく私邸の建築に着手したとみられる。なお建築費については詳らかでないが、土地買収費は二百七十五円であった。また当地の地主は京都御所出仕の浜岡光恒(光哲の養父)である。

本邸は現行の地名でいうと京都市上京区寺町通丸太町上る松陰町一四〇番地の四に在り、寺町通を隔てて御所の東側に接している。ほぼ正方形の敷地(二八五二平方メートル)約八六〇坪。これは「登記法」によるが、「詳年譜」では九〇三・八四坪(約三〇〇〇平方メ



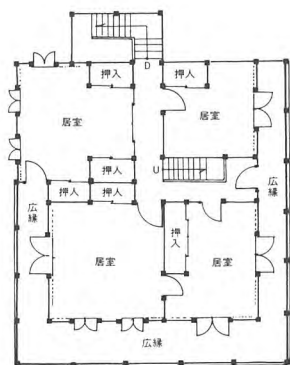
東南から見た新島旧邸

ートル)に、旧邸・附属屋・管理人住宅・物置、そして南端には新装成った新島会館が配置されている。なお寺町通に門を開いている。なお「附属屋」は、かつて江戸安中藩邸内(神田一ツ橋通小川町)にあった新島家住宅つまり裏の生家を做って造り、両親の隠居所に当てたものである。

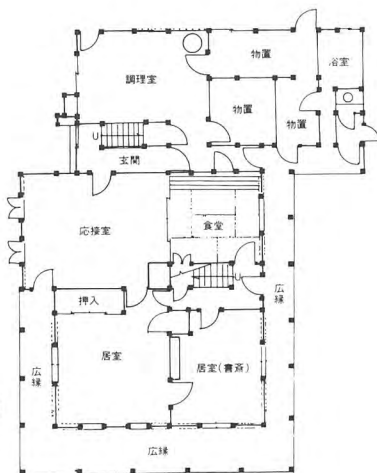
旧邸はこの敷地のほぼ中央に位置しており、木造・二階建て方形造に近い寄棟造檼瓦葺の屋根が付く。主屋は東西三七・二尺(一一・二七メートル)、南北四一・四尺(二一・五四メートル)で、一・二階とも四室からなり一階西北隅の応接室を除いて、すべて居室(書斎を含む)に当てられ、ホールはない。なおこの主屋の北側に接して玄関・階段、そして平屋の調理室・物置・浴室・便所などが付属している。

外観は、伝統的な日本建築の特徴とされる真壁構造の白漆喰壁、それに深い庇をもち、東南西の三方に上下階とも開放された広縁つ

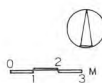
新島裏旧邸



2階復原平面図



1階復原平面図





内部（応接間）

まりベランダをめぐらす。なおこのうち南面の縁が特に広くとられているのが特徴的である。またベランダ手摺の堅子が、他の洋風住宅にみられるようなロクロ引きの線型がなく、細い角柱となっている。さらに屋上には今は使われていない簡易暖炉の煙突が立っている。

このような周囲にベランダをもつ構成を一般に「コロニアル・スタイル」

「タイル」（アメリカの植民地時代の住宅建築形式）と呼んでいる。この形式は別名「トロピカル・スタイル」（熱帯地方向きの）とも呼ばれるように、外部に向って開かれた住宅形式といえる。もともと広縁をめぐる手法は日本建築の中でも、社寺建築をはじめ住宅建築などにも見られるところであるが、一・二階を通じてめぐるのは近代以降で、これはアメリカにおけるコロニアル・スタイルの影響であろう。

内部は一・二階とも、ほぼ田の字型の四間取りで、二階のみ中央



内部（書斎）

に各室に通じる「I」字型の廊下が設けられている。このことによつて各室（寝室）がそれぞれ独立している。階下の四室は応接室のほか、それぞれ機能的に分けるならば、居間（南西）・書斎（東南）・食堂（東北）となる。なお居間に現在ある茶室は、のちに新島未亡人（八重）が改造したものである。また最も採光に恵まれた東南の居室が書斎に当てられており、ここには新島が愛用した机・椅子・書見台・書棚（造り付け）などが、生前のままに遺されている。

東北に位置する食堂は襖で応接室と境しており、北で調理場に通じ、また東南隅から二階に通じる階段へ出るなど、わが国の民家や近代都市住宅にみられる動線が巧みに働いている。またこの食堂は一部を板敷きにして他は畳が敷き詰めてあり、現在食卓と椅子が置かれているが、もとは坐式を採っていたのかも知れない。なおさきの階段の下は、いわゆる箱階段が模されており、後述するように地

元（京都）の大工が関わったことが知られる。

主屋北側のユーティリティ部分については特に記することはないが、便所の木製洋式（腰掛式）便器はユニークなもので、おそらく陶製の洋式便器が得難かった時代の窮余の策であつたに違いない。

ところでこの住宅の特徴であるコロナル・スタイルは、新島の滞米中の住まい体験が生かされていることはいうまでもないが、同時に京都の夏期にもたらす高温多湿の気候風土に、見事に対処しているといえる。わが国在来の雨戸を避けて全てヨロイ戸を採用したのも同様の理由からであろう。またこの建築に関しては、京都に長く住んでいた宣教医のW・テイラーの助言があつたといわれるが、おそらく彼もこの点を指摘したに違いない。

最後にこの建築手法からみる施工者の問題であるが、結論を先にいえば施主新島、助言者テイラーのもとで、日本のおそらく京都の大工棟梁が施工したものだといえる。

すなわち日本建築に伝統的な和小屋の採用、桁・棟木・垂木などの納まり、モデュールに尺寸法の採用、ヨロイ戸の左右引分け方式、ガラス戸に見られる、明り障子に似た方形組子、それに上げ下げ方式でなく左右引分け、さらに窓上部の紙貼り欄間などなど、明らかにわが国大工の仕口であり、わが国の大工でなければ、思い付き難い工夫といえよう。

このようなわが国近代初期の住宅は、のちに「擬洋風建築」とも呼ばれるのであるが、その呼び名はともかくも、いわゆる居留地に建てられた異人館に能う限りの近似を志し、とかく形式的に流れがちだった当時の和洋折衷住宅の中にあつて、この新島邸は異形を放

つていたであろうし、今後ながく近代住宅史に、その名をとどめるであろう。昭和六十年（一九八五）、京都市指定有形文化財に指定された。（建築史家）

参考文献

- 森中章光「改訂増補 新島襄先生詳年譜」
- 同志社「同志社百年史」全4巻
- 前久夫「同志社の近代建築」(補遺)

新島旧邸を描く

笠井 昌昭

夏の新島旧邸は、世間の喧騒からとりのこされたかのようにしんと鎮りかえていた。

京都の洋風住宅の先駆をなすこの邸の特色は、一・二階の東と南側にめぐらされた開放的なベランダと縦長の鐵戸とにある。それにながら玄関はあまりにも和風そのものだ。

「敬一は寺町の飯島先生の門に車を下りて、チヨコレット色に塗った格子戸をあけて、昔ながらの狭い玄関の銅鑼を鳴らした」と、『黒い眼と茶色の目』にはある。徳富蘆花が「昔ながらの」と書いたのは、洋風の箇所比しての古めかしさをさしてのことであろう。じつところの仄暗い玄関を眺めていると、そのガラス戸が中からあいて、新島先生の姿があらわれてくるような幻想にとらわれる。

いつも葉書サイズの絵しか描かないので、大きな画面の扱いには途惑いがあつた。表紙絵にはコットン紙を、裏表紙絵にはストラスモアの厚手の画用紙を使った。わたしとしては目次扉の画の書斎の鉛筆画に愛着がある。

（大学文学部教授）

新島襄略年譜

(年齢は数え年)

西暦	和暦	年齢	事 項
一八四三	天保十四	一	一月十四日(陽暦二月十二日)、江戸神田の安中藩邸内に生まれる。幼名は七五三 ^{しめ} 太 ^た 。 父・民治 ^{たみはる} 、母・とみ、姉四人。一八四七年十二月十四日、弟雙六生まれる。 安中藩の学問所に入り、添川廉斎について漢籍の学習をはじめ。また剣術・馬術のけいこを始める。
一八五三	嘉永六	十一	藩主・板倉勝明の命で、田島順輔について蘭学をはじめ。
一八五六	安政三	十四	十一月十五日、元服する。諱は敬幹。藩の祐筆補助役を命ぜられる。
一八五七	安政四	十五	父が藩主に随行して大阪に出張中、祐筆職代勤および書道教授をする。
一八五九	安政六	十七	この年、再び蘭学をはじめ。
一八六〇	万延元	十八	藩主の護衛役に選ばれ、はじめて新島家の故郷安中に行く。
一八六二	文久二	二十	十一月、幕府の軍艦教授所にかよい、数学・航海術を学ぶ。この頃、江戸湾内でオランダ軍艦をみて、その偉容に驚く。 九月十九日、眼病のため軍艦教授所を退所、甲賀源吾の塾に入り洋学を学ぶ。 十一月十二日、備中松山(現・高梁市)板倉藩の洋式帆船・快風丸に便乗し、備中玉島(現・倉敷市)に向かう。航海を終え、翌年一月十四日江戸に帰る。

一八六三	文久三	二十一	蘭学のほか英語の勉強をはじめめる。和訳のロビンソン漂流記、漢訳のアメリカに関する書物や聖書抜粋などを読む。
一八六四	元治元	二十二	三月十二日、快風丸に便乗し品川を出帆、四月二十一日函館に到着。 五月五日、ロシア領事館付司祭ニコライの日本語教師となり、司祭の家に移る。 六月十四日(陽暦七月十七日)、福土卯之吉(成豊)のあつせんで、夜半、アメリカ商船ベルリン号に乗り込む。翌朝出航。七月一日、上海に入港。 七月九日、ベルリン号のW・T・セイヴォー船長のあつせんで、米船ワイルド・ロウヴァー号(船長H・S・テイラー)に乗り替える。 十一月十一日、ホンコンに上陸、船長に小刀を売った金で漢訳聖書を買う。 (以下陽暦)
一八六五	慶応元	二十三	七月二十日、ボストンに入港。十月十四日、ワイルド・ロウヴァー号の船主A・ハーディー夫婦の家にひきとられる。 十月三十日、ハーディーの好意により、アンドーヴァーにあるフィリップス・アカデミー(高校)英語科に入学。 十二月三十日、アンドーヴァー神学校付属教会で洗礼を受ける。 六月、フィリップス・アカデミー卒業。一夏チャタムのテイラー船長両親宅に遊ぶ。 九月、アーモスト大学に入学。 夏休み中、ニュー・ハンプシャー州各地を歩き、鉱山などを見学する。 春休みを利用してアーモストの南部地域の銃器、製紙、織物工場などを見学する。 夏休み中、コネチカット州を旅行。テイラー船長両親宅で一夏をすごす。 七月十四日、アーモスト大学を卒業、B・S・の学士号を得る。
一八六六	慶応二	二十四	
一八六七	慶応三	二十五	
一八六八	明治元	二十六	
一八六九	明治二	二十七	
一八七〇	明治三	二十八	

一八七一	明治四	二十九	九月、アンドーヴァー神学校に入学。 八月二十二日、森駐米少弁務使のあつせんで、日本政府の旅券と留学免許状が送付される。
一八七二	明治五	三十	五月十一日、田中不二麿文部理事官と共に、ニューヨークを出帆、ヨーロッパ諸国の教育視察の旅にでる。ヨーロッパ諸国の教育制度を視察したのち、九月からベルリンに滞在、田中文字部理事官の報告書「理事功程」の草稿を書く。 帰国する田中不二麿に報告書草案（のちに刊行される「理事功程」の一部）を渡す。 あとリユーマチ治療のためウィースバーデンで湯治。九月十四日、ニューヨークに帰る。
一八七三	明治六	三十一	九月、アンドーヴァー神学校に復学。
一八七四	明治七	三十二	五月、アメリカン・ボードの日本ミッシヨンの准宣教師に任命される。 七月二日、アンドーヴァー神学校卒業。 九月二十四日、ボストンのマウント・ヴァーノン教会で按手札を授けられる。 十月九日、ラットランドで開かれたアメリカン・ボード第六十五回年会の最終日に演説、日本にキリスト教主義学校の設立を訴え約五〇〇〇ドルの寄付申込みをえる。 十月三十一日、サンフランシスコを出航、十一月二十六日夕方、横浜に帰着、D・C・グリーンらの出迎えをうける。 十一月二十九日、安中の両親と十年ぶりに対面する。
一八七五	明治八	三十三	一月九日、横浜から父にあてた手紙に初めて「襄」と記し、「ジョセフの略也」と説明する。 一月二十二日、大阪に到着。川口与力町の宣教医M・L・ゴードン方に止宿。

一八七七	明治十	三十五	二月、渡辺大阪府知事の賛成が得られず、大阪に学校をつくることを断念する。 四月、京都を訪れ、榎村正直京都府大参事、山本覚馬らに面談、山本から京都に学校をつくるようすすめられる。 六月七日、J・D・デイヴィスと共に山本覚馬を訪問、学校用地として、相国寺門前の旧薩摩屋敷跡約五八〇〇坪をゆずり受けることとなる。 六月、大阪から上京第三十一区の山本覚馬方に移転する。 八月二十三日、山本と連名で「私塾開業願」を榎村権知事宛に提出、九月四日認可を得る。 十月、仮校舎として寺町丸太町上ル松蔭町の高松保実邸を借り受ける。また山本方から上京区新島丸頭町（現在の鴨沂高校の東南）に移転する。 十一月二十九日、同志社英学校を開校、教員は新島とデイヴィス、生徒八名。 一月三日、デイヴィス宅で山本覚馬の妹八重と結婚式をあげる。 四月二十六日、両親、姉・みよ、甥・公義ら安中をひきはらい、京都に来る。 九月十八日、旧薩摩屋敷跡に建築中の校舎二棟、食堂一棟が完成、献堂式を行なう。 この頃、相国寺門前にある豆腐屋の廃屋を買収、聖書教場とする。 九月、L・L・ジェインズの紹介で、熊本洋学校の生徒が相ついで同志社に入学する。 十月二十四日、デイヴィス宅に女子塾を開設。 十二月三日、新島宅に京都第二公会が設立される。 四月二十八日、女子塾（同志社分校女紅場）京都府から開校の許可を得る。 九月二十一日、京都府の認可をえて、女紅場を同志社女学校と改称する。
一八七六	明治九	三十四	

一八七八	明治十一	三十六	九月七日、ボストンの友人シアーズの寄付による私宅が寺町通丸太町上ル松蔭町に完成、新島丸頭の仮寓から移転する。
一八七九	明治十二	三十七	九月十六日、女学校をデイヴィス宅から今出川通寺町西入三丁目常盤井殿町の新校舎に移転。 二月十一〜十二日、勝海舟を訪問する。
一八八〇	明治十三	三十八	六月十二日、第一回卒業式を行ない、英学校余科（神学）生十五名に卒業証書を授与する。
一八八二	明治十五	四十	四月十三日、英学校普通科二年上下級合併問題に端を発したいわゆる「自責打掌」事件おこる。 一月十一日〜十六日、奈良県大滝村の土倉庄三郎を訪い、大学法学部設立のため五〇〇〇円の寄付約束をえる。
一八八三	明治十六	四十一	六月二十九日、女学校第一回卒業式、卒業生五名。 この年、大学設立のための構想を練り、草稿数点をしたためる。
一八八四	明治十七	四十二	十一月七日、「大学設立之主意之骨案」脱稿。 十一月十六日、医学校設立の相談のため、岡山に宣教医J・C・ベリーを訪う。 二月十五日、同志社社則四カ条を制定。 四月、「同志社大学校設立旨趣」を印刷・頒布。また、「同志社設立の始末」を発表する。 一月十九日、大学設立の仮発起人会を開く。 一月三十日〜二月二十日、徴兵令改正問題につき、東京で奔走する。

一八八五	明治十八	四十三	四月一日、二日、京都商工会議所で大学設立につき集会を開き、設立の「綱領」「仮則」などを定める。
一八八六	明治十九	四十四	四月六日、神戸港から欧米旅行に出帆、イタリア、スイス、ドイツ、イギリスをへてアメリカへ向かう。
一八八七	明治二十	四十五	五月、山本寛馬と連名の「明治専門学校設立旨趣」を印刷・頒布する。 八月六日、スイスのサンゴタルの坂道を登る途中、呼吸困難となり、容体悪化。 山頂の旅館で英文の遺書を書く。 九月三十日、ボストンに到着しA・ハーディー夫妻らと再会。 十一月十一日、アメリカン・ボードの総主事N・G・クラークに、日本教化促進について計画書を提出する。十二月、クラークと東北伝道計画について相談する。 十二月十二日、アメリカから横浜に帰着。 十二月十八日、同志社創立十周年記念会を行なう。 五月下旬、会津、米沢を経て仙台におもむき、英学校設立について相談する。 六月、ベリーはデイヴィス邸に仮診療所を開き、また、L・リチャーズは看病婦学校の授業を開始する。 十月十一日、仙台に宮城英学校を開校、校長新島襄、副校長市原盛宏。 一月三十日、父明治永眠。 六月十七日、八重夫人を同伴して、宮城英学校を改組した東華学校（校長は新島）の開校式に出席する。あと、札幌へ静養におもむく。 八月十三日、八重夫人と札幌に静養中、A・ハーディー氏死去の通知を受ける。 十一月十五日、同志社病院開院式、京都看病婦学校開校式を行なう。

一八八八	明治二十一	四十六	この年以降、一致・組合両教会合併問題が大学設立募金運動と重なり、心労重なる。四月十二日、知恩院に京都の名士六〇〇人以上を招き、大学設立について支持と理解を訴える。
一八八九	明治二十二	四十七	四月二十二日、井上馨邸で政財界の有力者と大学設立について懇談中、脳貧血のため倒れる。 七月十九日、外相・大隈重信邸に政財界の有力者集まり、約三万円寄付申し込みをえる。八月より九月中旬にかけて伊香保に静養する。 十一月七日、「同志社大学設立の旨意」を「国民之友」はじめ全国の主要新聞・雑誌に発表する。 五月八日、アメリカのJ・N・ハリスから理化学学校設立のため合計一〇万ドルの寄付申し込みを受ける。
一八九〇	明治二十三	四十八	八月二十七日、アーモスト大学から名誉学位 (LL. D.) を贈られることを知り、大いに困却する。 十月十二日、病軀をおして大学設立募金運動のため東京へおもむく。 十一月二十八日、群馬県前橋で運動中、胃腸に激痛をおぼえ、募金運動を中止して十二月十三日東京に帰る。 十二月二十七日、療養のため神奈川県大磯の百足屋に移る。 一月二十一日、八重夫人、小崎弘道、徳富蘇峰を枕もとに呼び遺言をのべ、徳富がこれを筆記する。 一月二十三日、午後二時二十分永眠。病名は急性腹膜炎症。

一八九一

明治二十四

一月二十四日、夜十一時二十分、遺骸が七条駅（現・京都駅）に到着、生徒その他約六〇〇名に迎えられて自邸に帰る。

一月二十七日、午後一時より同志社チャペル前で告別式を行う、参列者約四〇〇〇人。式後、同志社生徒により若王子墓地に運ばれ、埋葬される。

一月、勝海舟の揮毫になる新島襄墓碑が建立される。